しろクロ

月冴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しろクロ

【Ｎコード】
Ｎ６２６９Ｉ

【作者名】
月冴

【あらすじ】
突如少女の前に現れた少年は言った。
「君、誘拐されるから」
その一言で始まった少女と少年の少し奇妙で、少し複雑で、少しシリアスもある毎日を描く、ドタバタ裏社会物語です！
――――――――――――――――――――――――――――――――
このお話は２０１５年が舞台です。

Ｆｉｌｅ．００　前書き

私の名前は鳳凰院　暦、十六歳の高校一年生です。
これから先に記す事は私の経験した実話、
少年と少女のお話。
それはとっても非現実的で、限りなく夢に近いお話。

そう、私　鳳皇院　暦はあの日、見知らぬ少年に誘拐されたのです。

Ｆｉｌｅ．０１　黒猫の様な少年（前書き）

Ｆｉｌｅ．０１は序章のような感じで読んで頂けたら幸いです。

Ｆｉｌｅ．０１　黒猫の様な少年

今日この頃、私を取り巻く環境は平和そのものです。
そんな私は今、夕暮の中自宅へ向けて下校中。
呑気に鼻唄交じりでスキップなんかしちゃったり、
今の私はとても機嫌がいいのです。

なんたって今日は私の誕生日。
そんな事を思っていると私の前に少年が一人、気付かぬ間に立っている。

「あー　鳳凰院　暦ちゃんですか？」
「えっ、あ、そうですけど」
「どうも　こんにちは」
「こんにちは」

ニコニコと笑顔を浮かべる優しそうな少年は挨拶を済ますと、
いきなり私の手を握る。
なんの前振りもなかったので私は動揺してしまうけど、
心を落ちつかせて声をかけてみる。

「あの～」
「何？」
「手」
「……で？」
「いや、あの。放してください」
「暦ちゃんさ、今の状況分かってる？」
「あ、あなたに手を掴まれてる」
「いや、まぁ間違いじゃないけどさ。ほら、お父さんの方から聞い

てない？」
「……何も」

私の返事を聞くと少年は困った表情を浮かべ、それから携帯を取り出して誰かへ電話し始めた。私の手を握ったままで。

「あっ、僕ですけど。お譲さんにはまだお話しされてないんでしょうか？
　あー　そうですか、いえ、問題はないですよ。はい、では失礼します」

「誰に電話してたの？」

私は少年に聞いてみる。少し声を震わせながら、少し見当をつけながら、

「君のお父さんだよ」
「何でパパに電話してるの、もしかし新しいＳＰさん？」
「いや、違うよ」
「じゃあなんなの？」
「ん～　確実な事を言えば。君、誘拐されるから」

……へっ？
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！
「ななな、何言ってるの！？」
「あんま大きい声出さないでくれるかな、警察にでも通報されたらめんどくさいし」

「でも、誘拐なんて言われたら」
「大丈夫。親公認だから、問題ないって」
「本人の意思は！？　もう完全に無視じゃない」
「そうだけど、まぁ依頼だし、仕方ないんだって」

結局、路地で大声上げて話すのは周囲の住民方に迷惑がかかる。と私が少年を言いくるめて、少年が居住しているという、雑居ビルにやってきた。
雑居ビルは私の想像通り少しくたびれた感じの雰囲気を放っている。で、少年が居住しているのはこのビルの中の一室らしい。

「中は少しばかり散らかってるけど、文句は言わないでくれよ」
「状況によるかな」

私達は今階段を上っている。
エレベーターがあると思っていたけど、よく考えてみればこの古さでエレベーターなんて物が設備されている訳がない。
あったとしてもきっと錆び付いて動かないだろうし。

３Ｆ　と書かれたプレートの階で少年は「こっち」と風景とは似つかない洋風なドアを指差す。

木製で立派なドアだ。
その立派なドアに、『チェス』と書かれたプレートがぶら下げられていた。

それを見た私は思い出す。
少年は『依頼』と言っていた。

きっと『チェス』というのが店の名前なんだろう。

「ここ？」

「そう、ここが我が家さ」

少年はそう言ってドアを開ける。

「ようこそ　チェスへ」

中は意外と整頓されていた。

散らかっている。と言っても十分許容範囲、これくらいなら私の部屋とそう大差ない。

「さ、そこのソファーにでも掛けてくれよ」

「う、うん」

少年は私がソファーに座ると、紅茶をテキパキと淹れて私に出してくれる。

「さぁ、話の続きをしようか？」

「その前に、その前にアナタの名前を教えてよ。どう呼んでいいのか分からないし」

「そういやまだ言ってなかったっけ、僕の名前はクロっていうんだ」

「……それ偽名でしょ？」

「この名前の方がもう本名なんだよ。

それに鳳凰院　暦って名前もすでに使い物にならないよ」

「ちょ、それってどういう意味？」

クロ君は笑みを浮かべながらそう言う、なんて生意気な笑みなんだろう。

私にそう思わせるほどに、クロ君の笑みは憎らしかった。
それに言っている事も気に食わない。

クロ君は自分の分の紅茶を淹れて、
カップを手に持ち私と対峙する形でソファーに腰掛ける。

「意味？　簡単だよ。今をもって鳳凰院　暦は行方不明になった。
だからもう使えない、使わせない。
学校も転校になるから、もう手続きは済ませたしね」
「ちょ、勝手に話を進めないでよ。意味分かんないし」
「え、分かんないの？　簡単だろ？　もう君は以前の君じゃない、
少なくとも一定の時期が来るまではね」
「……」

私は黙り込む。
もうそれ以外にする事がないように思えたから、でも絶望した訳じゃない。

理由は簡単、どうせパパの仕業だからと検討がついているからだ。
私が言う事を利かなかった腹いせに違いない。

私は世間一般的に言うと、お嬢様と呼ばれる部類に入る。
パパは政財界でその名を轟かす人間で、裏世界にも太いパイプがあって、
黒い噂が絶えない事でも有名だから、
だから、そんなパパを持っているから、私もそれなりに耐性というものが出来つつある。

「パパに頼まれたの？」
「まぁね。でも断る事も出来たんだよ？」

「ウソでしょ、お金をたくさん積まれたから引き受けたんでしょ？」
「いや、君の事が心配でさ。僕に断られたら、
こわーいオジサン達に頼むつもりだったんだよ？　君のお父さん。
だから引き受けた」
「……でも、お金も受け取ったんでしょ？」
「まぁね。当然の成り行きさ。だろ？」

言ってる事が矛盾している気もするけど、私はなぜだかクロ君に惹かれる。
なんか初めて会った気がしないからだろうか、それとも。

「で、君の新しい名前なんだけどさ。僕はしろちゃんって呼ぶから」
「しろちゃんって、苗字は？」
「自分で適当に考えといてよ。この書類に書いといてくれればいいから」

そう言ってクロ君は書類を一枚、私に差し出す。
私は流れに逆らうことなく、流されてしまい。

「は～　書いちゃったよ」
「別にいいじゃん、新しい人生をエンジョイしなって、僕の助手としてさ」
「……うそー！？」

こうして私はクロ君に誘拐されて、クロ君の助手として住み込みで働く事になりました。

Ｆｉｌｅ．０１　黒猫の様な少年（後書き）

次話から少しシリアスな内容が加わります。

本編スタート的な？

File．02　唐突の訪問者

クロ君と出会ってから二日目の事でした。
私がお昼の片付けをしている時、
不図ノックが部屋に響き渡り、私はお客さんが来たと思いドアを開けてた。

「どちら様ですか？」
「宅配便でーす。サインお願いします」
「はい、御苦労さまでした～」
「誰から～？」
「えーっと、差出人は……書いてないですね」
「これ使って」

と、クロ君はテレビのチャンネルと間違えそうな機器を私に向けて投げた。
クロ君によると、これは危険物に反応する機械らしく、
私は言われた通りにボタンを押しながら測定する。

「以上は、ないですね」
「んじゃ、開けていいよ」

開けてみると私の思考は限りなく停止したけど、
すぐに思考は再起動して正しい行動を私に取らせる。

「キャーーー！」

私の悲鳴に驚いたクロ君は社長が座っていそうなイスから転げ落ち

る。

「な、どうしたの？」
「あっ、あっ」

言葉が出てこない。
出て来ても口にしたくはない。
私は涙を浮かべながら、届いた箱を指差す。
見兼ねたのか、クロ君は溜息を一回吐いて傍に来てくれた。

「なっ、これは」

クロ君も第一声は驚きだった。
いや、たとえ誰であっても驚きの言葉、もしくは表情を現すと思う、
なんたって箱中に入っていたのは、血の滴る肉塊。
それも牛や豚とかの一般食用に用いられるものじゃなく、
私と同じ人間のだ。

「これは手の込んだ嫌がらせだな～　人の腕送って来るなんてさ、
どうせなら豚とか牛とかにして欲しいよ」

まったく、とクロ君は言い箱を閉じる。
それにしても嫌がらせって、これはどう見ても嫌がらせのレベルじゃない気がする。
そう、脅迫と取るべきだと私は思うのだけれど、言うべきか、否か。

「さて、どう処分しようかな」
「ねぇ、クロ君。警察とか呼ばなくていいの？」
「へっ？　そんな自殺行為出来るわけないでしょ。俺も立派な犯罪者なんだから」

自覚してたの！
うわー　凄く以外だよ。
初めて宇宙人に遭ったくらいの驚きだね。遭った事ないけど。

「でも、処分って」
「俺もその道の友人はいるからさ、どうとでも対応できるよ。
あとさ、しろちゃんは僕の事どの程度の人間と自覚してくれてるのかな？」
「悪ガキ？」
「……。いや、まさかその程度とは、聞かなかった方が良かったかも」
「ご、ごめんなさーい」

壁に手をついて落ち込むクロ君に私は必死に謝る。
真摯な謝罪が届いたのか、クロ君は壁から手を放す。

「僕はさ。裏社会じゃ知らない奴はいないって呼ばれるほどの有名人だよ？」
「えー　クロ君が！？」
「いや、性格には『チェス』のオーナーなんだけどね。有名なのは」
「オーナー？」
「そっ、ここの本当の主さ、僕はオーナー代理。オーナーの助手ってとこかな」
「じゃあ、そのオーナーさんは今ドコに？」

私の問いにクロ君は本棚から世界地図を取り出して、ここらへん。
と指差して私に教えてくれた。

「……マダガスカル？」

「バカンスとビジネス中かな」
「凄い人だね」
「全くだよ」

クロ君は箱を外に押し出して、携帯から誰かにメールを送る。
誰に送ったのか気になったけど、
それを知ってしまったらもう戻れなくなるような気がして、私はあえて聞く事を止めた。

本当に、クロ君は私の知らない世界の人なんだと、改めて認識させられた出来事だった。

Ｆｉｌｅ．０２　唐突の訪問者（後書き）

Ｆｉｌｅ．０２は閑談のような感じで書いてみました。
短いですが、次話へつなげる為なのでご理解のほどを。

Ｆｉｌｅ．０３　嵐の前の嵐

その後、腕入りの箱は外に放置される事になった。
なんでもしばらくしたら業者さんが引き取りにくるそうで、お金を私に渡して、
クロ君は「ちょっと出かけてくる」と事務所（チェス）を後にしました。

残された私は一人ソファーで寛いでいる。
お菓子を食べたり、お茶を飲んだり、テレビを見たり、そんな暇人
寸前の私は
再び聞こえたノックに身体が震え、思考は恐怖の瞬間を脳裏に蘇らせる。

トントン。
トントントン。

無言のノック。
それが恐怖を駆り立てる。

「は、はーい。どちらさまですかー？」

私は扉を開けることなく、ただ誰なのか尋ねる。
業者さんかもしれないけど、あれを見たあとなので、きっと正しい判断だと思う。
というか、その行動しか取れなかった。

「あのー　業者の者ですがー」
「い、今開けます」
「どうも、こんにちは。お譲さん」

私はドアを開けると、非常にまずい物が視界に飛び込んでくる。
三十代くらいの男の人は、顎ひげを蓄え、タバコを口に銜えて、
笑みを浮かべながら手には警察バッジを持っていた。
私は咄嗟にドアを閉めようとしたけど、
この人は足を間に素早く入れて、手でドアを完全に静止させる。

「酷いな～　俺はそんなに怖いおじさんに見えるのかい？」
「け、警察の方が何の用ですか？」
「いや、君に用はないんだよ。クロはいるかな？」
「今はいませんけど」
「ん、そっ。じゃ上がらせて待ってるわ」

刑事さんはあと少しで閉まるドアを無言で、特に表情も変えずに、
まるで赤子を持ち上げるが如く、ドアを無理やり開けた。
私は咄嗟に手を放したので大事には至らなかったけど、
刑事さんは　お邪魔しま～す。と言って中に入って来た。
それからソファーに座った刑事さんは、辺りを見回して何かを探す
素振りを見せる。
探し物が見つかったのか、机の下に手を伸ばす。
どうもタバコの始末に困っていたようで、
口に銜えていたタバコを机の下に置かれていた灰皿で火を消す。

「どうぞ、粗茶ですが」
「お～　これはどうも、クロだったらこうは対応してくれないんだ
よね。
　やっぱ女の子が助手ってのはいいな～」
「ところで、何で業者って名乗ったんですか？」
「じゃなきゃ開けてくれなかったろ？」
「盗聴ですか？　犯罪ですよ」

「いや、いや、立派な捜査だよ。法律にだって触れてないし」
「大切な事なのでもう一度言いますよ。盗聴は犯罪です！」
「それがな～　この紙一枚でどうとでもなるんだよね～」

刑事さんはそういって内ポケットから紙を一枚取り出す。
それにしてもこの人は本当に刑事さんなのだろうか？
こんなにチャラチャラした人が刑事だなんて、イメージに合わない。
でも私はこの人が刑事である事を認めなければいけなかった。

「裁判所命令？」
「そっ、いわゆる令状ってやつさ。クロ、いやチェスはね。
裏じゃ超がつく有名どころだからね。常に目を光らせているのさ」
「じゃあ、今日は何の用でき……」

私は外に置いている箱の事を思い出した。
っていうか、私ってもう犯罪者じゃん。

「何か疚しい事でもあるのかい？」
「いや、何にも」

私の声は多分、というかきっと嘘をついている雰囲気を出していたのだろう、
刑事さんは少し笑みを浮かべて立ち上がる。

「さて、確認も済んだ事だし。捜査しますか」

刑事さんがそう言った瞬間、見計らったかのようなタイミングでクロ君が帰って来た。
クロ君は男の人を見つけると、持っていたコンンビニ袋からカンを取り出して、

刑事さんに投げつける。
「おっと、危ないな～」
「それ飲んだら帰れ」

クロ君の言葉に私も男の人もカンを注視する。
それは二十歳にならないと買えない飲料、ビールだった。
なぜ未成年であるクロ君がコンビニ袋からビールを取り出せたのかは疑問に思うけど
私は何とな～くではあるが、察する事が出来た。
多分、コンビニの店員さんと仲がいいのだ。

そう思う。
そう思いたい。

「気遣いありがたいけど、まだ職務中だからね～　これは飲むわけにはいかないよ」
「じゃあ、とっとと帰れ」
「そりゃー　無理な話だね。こっちは仕事で来てるんだから」
「アンタが仕事？　明日は雪でも降りそうだな」
「とぼけてもダメだよ。外の箱、あれは一体だれなのかな？」

刑事さんの言葉にクロ君は視線を尖らせ、場の空気が様変わりした。
刺々しく痛々しい緊張感が蔓延する。

「忘れたのかよ、アンタには借りを作っといたと思うんだけどな」
「あ～　この前くれた情報だろ？　アレには感謝してるよ。おかげで逮捕できた。
　でもね、今回のはそうはいかないんだよね」
「どういかないんだよ？」

「あれの中身がさ、もしかしたらお偉いさんのかもしれないんだよ」
「僕たちには関係ないな、帰ってくれ」
僕たち？
今僕たちって言った？
私はこの時、なんだか、物凄く嬉しい気持ちになった。
今はピンチなんだけど、その気持よりも大きく私を包み込む。
「それにさ。そこのお譲ちゃんも怪しいし」
「助手だよ。一人で仕事こなすのは大変だからな。特に家事」
「あー　なるほど。でも、最近鳳凰院のお嬢様が消えたって言うじゃない、
だからさ、ほんの少し前まえでいなかった助手、しかも年頃の女の子ときたら、
疑わずにはいられないだろ？　刑事だしさ」
「じゃあ、アンタの勘も錆び付いてきたな。彼女はオーナーの親戚だ」
「……そっ、じゃあ仕方ないね」
あっけなく、あっけなく刑事さんは私の話題を終わらせた。
オーナーさんの名前をクロ君が出した途端に声のテーションが明らかに落ちた。
というか、諦めた？
それほどオーナーさんは凄い人なんだろうか。
聞いた限りじゃ、三十代の面は良いけど腹黒で策略大好きな変人。
という事だったけど、あながち間違いじゃないのかも。
「とにかく、君達さ。署の方まで来てくれないかな～？」
「無理、却下、帰れ」

「く、クロ君。言う事聞いた方がいいじゃないのかな？　ほら、この人警察の人だし」
「おっ、お譲ちゃんは物わかりがいいね～　そういう子大好きだよ」
「近寄らないでください」

私はすぐさま警戒レベルを上げて距離を取る。
なんか、この人からは『変』オーラが出ている気がしたけど、
まさか、私みたいな少女が好みだったなんて。

「いや、僕は年下に興味はないよ。どちらかというと熟女の方が好みかな」
「で、アンタは好みのタイプをわざわざ話に来るために来たのか？」
「おっと、話がそれたね。で、返事を改めて聞かせてくれるかい？」
「ちょっと待て、電話しなきゃいけないんだ」

クロ君は時計を指差しながら、固定電話の受話器を取って電話をかける。

「あー　僕だけど、困るんだよね～　えっ何言ってるか分からない？」

クロ君は笑顔で、優しい口調で話している。
けど、「じゃあ、自分の胸によく聞いてごらんよ」と黒々しい覇気を放ちながら、
口調も恐怖を感じさせる物言いで喋り終わるとドンと音が鳴るほどの勢いで、
受話器を元の位置に叩きつける。
それを目の当たりにした私の脳は一瞬ではあるけど、クロ君を否定した。

「く、クロ君」

私は声を震わせながら声をかける。
すると、いつものクロ君に戻って、「なに？」と返事をしてくれた。
それを聞いた私はとても心が落ち着き、全身の力が抜けて、ソファーに崩れるように座る。

「誰にかけた？」
「すぐに分かるよ」

その直後、刑事さんのポケットから着信音が聞こえた。

「まさか、お前！？」
「出なくていいの？」
「くっ、　もしもし。はい、はい。分かりました」

刑事さんの表情は怒りに満ちている。
明らかに怒っていた。
携帯をポケットに戻すと、「凄い事してくれるね」と低い声色で、
私が感じた第一印象をものの見事に払拭してクロ君に言葉を掛ける。

「こうみえても僕には友達が沢山いるからさ、どうとでもなるよ」
「そうか、あの箱には君にも心辺りがあるのか」
「……相変わらず、勘は錆び付いてるね」

クロ君がそう言うと、刑事さんは最初の笑みを見せ部屋から出て行く。

「ねぇ、クロ君」
「しろちゃん、もうすぐ嵐が来そうだよ」

クロ君は私の言葉を遮って警告するかのように、そう告げた。

Ｆｉｌｅ．０３　嵐の前の嵐（後書き）

今回から嵐編ということで、

Ｆｉｌｅ．０４　嵐の前の静けさ

クロ君が警告染みたことを言った翌日、
私は最初になんて言葉を掛ければいいか迷ったけど、
いつも通りに接する事にした。

「クロ君おはよー」
「あぁ、おはよ」
「……」
「……」

静かだ。
何も話す事がない。
クロ君は新聞紙と睨めっこ中だし、洗濯も済んだし、
お昼の片付けも終わったし、何をすればいいのか分からない私は
とりあえず、ソファーに座ってお茶を飲む。

「ところでさ、給料どうする？」
「えっ、お給料ですか。っていうか出るんですか！」
「そりゃー　働いてもらってるし、出すのが当たり前でしょ。
　いらないんなら別に構わないけど」
「いや、要ります。めちゃくちゃ必要です！」
「何か欲しいものでもあるの？」
「いや、別になけど。在る分には困らないでしょ？」
「そりゃそうだ。で、いくら位がいい？」

クロ君は新聞を畳み、机に肘をついて、手を組み、私を見る。
私は、試されてる。と一人勝手に思い込み、なぜか真剣に考え始める。

「月給かな、時給かな？」
クロ君が考え込む私に向って、ヒントでも言っているのか様な口調で言う。

「うーん。そうだな、しろちゃんはどっちがいい？」
「私は……月給の方がいいかな」
「そう、じゃあ月給で。二十万くらいでいいかな」
「そんなにもらえるんですか？　家事とかしかしてないのに」
「いいの、いいの。僕じゃ家事なんてとてもできないからさ」

あははは、と笑うクロ君。
私は何がおかしいのかイマイチ理解できなかったけど、
相槌を吐かの様に、私も笑う。

「でも意外だなー　しろちゃんにとって二十万が、そんなに、なんだね」

ムカ、これって私を少しバカにしてない？

「クロ君、私は確かにお譲さまだったけど。
常識はきちんと身についてると自負してるよ」
「そう、まぁお父さんと仲悪かったらしい、
お金もそんなにもらえないよね～」

いや、もう完全にバカにしるよ、これ。

「クロ君、言葉は時に暴力よりも傷つける物だよ？」
「悪かったよ、少し言いすぎた」

クロ君は意外と素直に謝って、再び新聞紙と睨めっこする。
あ～　なんて平和な時間だろ。

でも、この時間もそんなに長く続かないんだろうな。と
私が思っていると、まさしくその通りだった。

嵐は突然やってきた。

Ｆｉｌｅ．０４　嵐の前の静けさ（後書き）

嵐編　第二話どうでしたか？
ようやく次話、真打登場です！

Ｆｉｌｅ．０５　嵐来る！

「って、何で本当に嵐が来てるのよー！」

あれから数時間後、ゲリラ豪雨と呼ばれるものがここ一帯で発生したのです。
窓は豪雨と強風で、ガタガタと音を立て、外は視界も遮るほどの豪雨が降り、
室内の温度は五度も下がっちゃいました。
それでもクロ君はさっきまで呼んでいた新聞とは別の新聞を読み始め、
私は外に干していた洗濯物を大慌てで中に取り込みました。

「もー　服がビチョビチョだよ」
「じゃあ着替えればいいじゃん」
「……見ないでよ」
「見ないよ」
「本当に見ないでよ」
「見ないって、しろちゃんの下着姿見ても何の得にもならないし、その体じゃ」

クロ君が言ってはいけない事を言い終わる前に、
私はテーブルに置いてあった灰皿を無言でクロ君めがけて、
大リーグでも通用するんじゃないかと思える豪速で投げる。

「危ないじゃないか！」

クロ君は大声で私に抗議する。
避けれたのに。というか新聞紙でクロ君の姿を完全に捉えきれず、

結果的に的を外したのだけれど、
私は言いたい。
「当たらなかっただけ良かったじゃない！」
と。

「いや、暴力に訴えるのはダメだろ」
「前にも言ったでしょ？　言葉は時に暴力よりも」
「そんなの加害者側からの言い訳だろ！？　当たってたら僕完全に死んでたよ」
「そうならなかったんだからもういいじゃん」
「結果論！？　もしかしたらの事も考えてよ、助手に殺されるなんて笑えないから」
「私も殺人鬼にはなりたくないよ」
「じゃあ、もう物投げないでよ？」

うん。と私は頷き。
クロ君はマグカップに入っているコーヒーを一口飲む。
物凄い雨音が部屋に響く、風流。とはとても言えないのだけれど、
私は紅茶を飲んでいる。
雨音を楽しむ事は出来ないけど、
窓の外を見ればとても眩しい光（稲妻）が美しいアートに見える。
今、望むのは電線が切れて電力の供給が止まらない事だけだ。

「ねぇ、クロ君」
「何？」
「お客さん来ないね」
「まぁこの雨じゃ仕方ないでしょ」

「私はお給料の心配をしてるんだよ？　月給って言ったけど払えるの？」
「もちろん、ウチは以来の件数こそ少ないけど額は高いから、
従業員の一人や二人の年給くらい一括で払えるよ」
「へぇ～　この不景気に儲かってますな～」

よっぽど暇なんだね。とクロ君。
私は少し　ムッ、としたけど言ってる事は残念な事に間違ってないので沈黙する。
テレビをつけても画面は乱れてとても見れたもんじゃない、全てこのゲリラ豪雨が悪いのだ。

いや、これってもうゲリラ豪雨の定義を越えてるかも、
台風すらも凌駕しちゃってるってこれ。
そんなお客さんが一人も来るはずの無い気象の中、

トントン。
トントントン。
……トントントントントントントントントントントン

「はーい　今開けまーす！」

私は開けないといつまでもノックが止まない。と思ったので急いでドアを開けた。
―――のに誰もいない？

「ぽ、ぽ、ポルターガイスト！？」
「違う！」
「今度は声が聞こえる。ここってもしかして幽霊の巣窟なんじゃ」
「違う下！」

私は言葉の言う通り、下を見る為に視線を落とすと。
そこには地面についてしまいそうなロングヘアーがずぶ濡れの少女、
というか幼女？が立っていた。

「誰？」
「寒い」
「あぁ、とにかく上がって、このままじゃ風邪ひいちゃうから」
「うん」

私は浴室にこの子を連れて行き、シャワーを浴びせる。

「寒かったでしょ？」
「平気だよ。私はもう子供じゃないからね」
「ふふ、そう。お名前はなんて言うのかな？」
「小雨（こさめ）って言うの」
「小雨ちゃんか、良いお名前だね。よしっと、じゃあ出ようか」

浴室から出ると私は小雨ちゃんの髪を丁寧に拭く、
長い分時間はかかるけど同じ女の子として髪の手入れには気を使う。
私の髪は肩ぐらいまでしかないから、男の事多分拭く分にはそう変わらない。
つまりは短時間で乾くという事。

「ドライヤーかけるから目閉じててね」
「う～ん」
「ところでここには何しに来たの？」
「クロに用事があって来たの～」
「依頼？」
「ん～　そんなとこかな～」

そう。と私は呟き。
ドライヤーを止める。

「乾いたよ」
「ありがと」

小雨ちゃんはそう言ってややはしゃぎ気味で応接兼デスクへ行く。
今頃はクロ君がイスに座ってまた新聞紙でも読んでいる頃だろう、
きっと小雨ちゃんを見たら驚くだろうから、私は小雨ちゃんの後を追う。

「来たな嵐が」

クロ君の第一声。

「そうだね。さっきより雨の勢いが凄いや。あぁそうだ。この子、小雨ちゃんっていうの」

外は一層雨脚がはやまっている。

「こんにちは」
「あぁ、こんにちは。今日は何の用で来たんだ？」
「ちょっと、小雨ちゃんはまだ子供なんだから、もっと優しく対応してあげなきゃ」
「小雨ちゃん？　何言ってるんだ。こいつの名前は嵐（あらし）だぞ？」
「へっ？　だってさっき聞いたら名前は小雨って」

小雨ちゃん？　は、クスッ、と笑って

「改めまして、こんにちは。私の名前は小雨　嵐って言います。よろしくね新人さん」

「えぇーーー！」

Ｆｉｌｅ．０５　嵐来る！（後書き）

さぁ、やってきました嵐ちゃん。
刑事さん以来の新キャラ登場！

といっても刑事さんはニ話前に出てきたけどね、

次回は嵐ちゃんの用事が明かされます。

File．06　嵐の急務

「別にウソついたわけじゃないし、アナタが早とちりしただけだよ？」
「そうかもしれないけど、それにクロ君。この子が来るって意味だったの？」
「なにが」
「ほら、この前。もうすぐ嵐が来そうだよ。って言ってたじゃない」
「あぁ、そうそう。こいつが来そうって意味だよ」
「なんでそう思ったの？　クロ」

嵐ちゃんはソファーに座ってクロ君に尋ねる。

「荷物が来たからさ、最初は嫌がらせかと思ったけど、友達が情報をくれてね」
「へぇ〜　その友達は一体誰のか教えてくれない？　ぜひ私もお友達になりたいし」

なんか、お互い腹の内の探り合いって感じだな〜
すごく私が邪魔な感じがする。

「それに本当に鳳凰院の依頼を引き受けたなんてね。あなたが」

嵐ちゃんの言葉にクロ君はこの前の刑事さんの時同様、
鋭い目つきに変わる。
どうも、こっちが本当のクロ君っぽい。

「嵐ちゃーん　アメあるけど食べるかな〜？」

私は嫌な空気を払おうと、棚からアメを二粒ほど取り出す。
「私はこう見えても十五だよ？　そんなのもう食べないって」
……マジ。
「いや、どう見ても幼女って言葉が似合う体型なんだけど、
言葉使いなんだけど！　十五、十五歳？　私と一歳違い！？」
私の反応が機に食わなかったのか、嵐ちゃんは
「あなたも年の割には可哀想な体型ね！」
と毒を吐く。
私はその言葉に胸が痛む、あまりないけど。
だって、だって、私よりない子に可哀想って、
もう立ち直れないかも。
そんな女同士の争いを男であるクロ君は、必死に笑いをこらえて観戦している。
「「何がおかしいの！」」
私と嵐ちゃんはシンクロしてクロ君に当たる。
「いやだって、二人ともそんな変わんないのに、ぷつ、面白くて」
私は腹部に鉄拳、嵐ちゃんはその体型を活かした空中飛びひざ蹴りを顔面に決め、

勢いそのままに空中で回転して机の上に着地する。
「「女の子は傷つきやすいのよ！」」
決まった。
完璧に決まった。
私と嵐ちゃんはお互いを認め、勝利の握手を交わす。
「で、荷物を引き取りに来たんだろ？」
「あー　そうそう。本来の目的を忘れるとこだった」
クロ君は顔に手を当てながら起き上る。
倒れたイスを元に戻して、大きな溜息をついて座る。
「荷物って、そんなの届いてないよクロ君」
「この前来ただろ、しろちゃんが悲鳴上げたアレが」
「でもあれって」
「まだ外にあったでしょ？」
「あったけど、あれは業者さんが引き取りに来るって」
「来ないよ」
私とクロ君の会話に嵐ちゃんは割って入る。
不気味すぎる笑みを浮かべて。
「そうなんだよね。業者と連絡が突然と取れなくなったんだよ」
「もしかして、それって」
「言わなくても分かるでしょ、私はね。
どうしてもアレが必要何だよ。だから渡して」

クロ君は立ち上がり、どこから出したのか銃を嵐ちゃんに向けて構える。

「ちょ、クロ君」
「嵐、やって良い事と悪い事があるだろ？」
「私も是非の区別はつけているつもりだけど、今回ばかりはダメなのよ」
「あれの中身は一体なんだ？」
「……秘書」
「誰の？」

クロ君の質問に嵐ちゃんは口を閉ざす。
でも、クロ君は答えない嵐ちゃんに対して、アクションを起こす。

ドーンッ。

銃声が私の目を瞑らせ、耳を塞がせる。

開けるのが怖い。
もしかしたら飛び込んで来るのは、赤く彩られた人形の様な子かもしれないから。
でも、私はゆっくりとだけど、確実に視界を広め、手を耳から離す。

嵐ちゃんは立っていた。
微動だりせずに、その場に堂々と立っていた。
その足元には銃弾が床にめり込んでいる。

「もう一度聞く、あれは誰だ」
「クロ君、もうやめてよ！」
「黙ってろ！　これはウチ（チェス）を利用したかもしれないんだ」

クロ君の瞳は殺すことも厭わないであろう覚悟を持っていた。
なんとなく、なんとなく分かった。
嵐ちゃんは次の質問次第で命を落とす事になるであろうことが。
その嵐ちゃんは逃げる素振りも、恐怖も、涙も浮かべない。
ただ、そこに立っている。
でも、重く閉ざした口を開く。

「分かった。答えるわ、だからその物騒な銃をおろしてもらえる？」

クロ君は無言で銃を机の蔭に仕舞う。

「あの中実は白山（しらやま）の首席秘書官よ」
「白山って、総理大臣の秘書さんじゃない！」
「そう、その白山よ。依頼があってね」
「で、依頼主は？」
「そこまで言わなくちゃ、ダメなの？」

クロ君は再び銃を構える。

「分かったよ、話します、話しますよ。依頼主はＣＩＡ、なんか政争っぽいよ」
「そ、それって暗殺ってやつじゃないの？」
「そうよ。私達の職業じゃ日常茶飯事だよ。クロにも経験あると思うよ。
　で、あの箱は返してくれるの？」
「まぁ、お前に借りを作っとくのも悪くないな、ＣＩＡに恨まれるのもやだし」
「でも、中身って腕だけだったよね。別に必要ないんじゃないの？」
「噂じゃ、首席秘書官は腕にマイクロチップ埋め込んでるらしい」

「その通り、だから腕だけ頂戴したわけ、
五体満足とはいかなかったけど、葬式はちゃんと出来るぶんいいよね？」

会話が怖いよ。
その風貌でいうと怖さが一層際立つ。
クロ君は納得の笑みを浮かべ、「持って行っていいよ」と言い、
嵐ちゃんは「借りはいつでも返すから」と言って去ろうとしたが、
クロ君が、

「今度、ウチ（チェス）を利用したら容赦しないから」

と背を向けた嵐ちゃんに向かって言葉を放つ、
嵐ちゃんはクロ君の言葉に足を止め、こちらを振り帰ろうとしたが、
そのまま無言で再び足を動かした。
気のせいか嵐ちゃんの小さな手は小刻みに震えていた。

「クロ君、いいの？」
「なにが」
「外、嵐だよ」
「あいつはいっつも軍用車で移動してるから大丈夫だろ」

……こういう職業の人って、変わり者が多いのかな？

「あぁ、そうそう。新しい学校どう？」
「うん。慣れてきたよ。みんな優しくしてくれるし」
「そっ、んじゃ。僕も安心して通えるわけだ」
「へっ？　今、なんて言った」
「君のお父さんがさ、娘を一人で学校に通わすのはちょっと、ってさ。

だから、一緒に通う事にした」

私の日常って、もう滅茶苦茶じゃん。

「唯一、学校にいるときが私の安息だったのに」

「ごめんね。でも仕事だから」

グッバイ私の安息。

でも、学校生活に劇的な変化なんてないよね？

Ｆｉｌｅ．０６　嵐の急務（後書き）

嵐編最終話でした、
次話からは、学園編に入ります。

File. 07　私立夕日ヶ丘学園（前書き）

学園編　第一話

Ｆｉｌｅ．０７　私立夕日ヶ丘学園

私立夕日ヶ丘学園はチェスからバスで十分くらいの距離にある高等学校、
在籍する学生はおよそ千人、東京ドーム三つ分の広さを誇るの学校です。
立地条件も良く、緑あふれる良い学校なのですが、私からしてみれば、
もう、良い学校とは呼べないかもしれません。
なぜなら、

「クロ君、本当に入学したんだね」
「入学じゃないよ、正確に言えば転入さ」
「でも、前に在籍した高校ないんでしょ？」
「そこら辺はコネで何とかなったよ、
それにしても噂に聞く高校という奴に行けるのはワクワクするな～」

クロ君はキラキラした目で窓の外を見ている。
方角的に見えるわけないのに、よっぽ楽しみなんだな。と私はクロ君を見て思う。
それにしても、噂の高校という奴って、本当に学校に行って無かったんだ…。

次は、夕日ヶ丘前～　夕日ヶ丘前～

バスのアナウンスを聞いた私達は席を立ち、バスを降りる。
バス停は校門の目の前に設置されていて、利用する学生や職員には嬉しい限りだ。

校門を過ぎると、校舎までの無駄に長い道が五百メートルほど続く、

「へ～　ここが高校ってやつか、でかいな～」
「いや、たぶんこんなのウチくらいだと思うよ」
「そうなのか？」
「普通ね、それより事務所空けてといてもいいの？　お客さんとか」
「大丈夫、大丈夫。ノックして中から開かなかったら帰るって」
「そりゃー　そうでしょ」
「中から開けずに入って来る人いたでしょ？」
「あー　そう言えばいたね」
「基本、あぁいう人の仕事は断るんだよね～
　こっち（裏）じゃウチ（チェス）は有名だからさ
　分かる人はノックして待つわけよ」
「へぇ～」

そんな話をしているとチャイムが鳴り響き、私達は大急ぎで教室に向かう。

少し前の話になるけど、私はクロ君からは【しろちゃん】と呼ばれている。
でも、親から授かった名前は【暦】、
鳳皇院（ほうおういん）　暦（こよみ）というのだけれど、
クロ君に誘拐されてからの名前は、白井（しらい）　明日香（あすか）になった。
ちなみに、白井　明日香というのは私が自分で決めてた名前だ。
クラスの中では、明日香ちゃんや白井さんと呼ばれている。
転入したての私にはまだニックネームと呼ばれるものは残念ながら付けられてない。

「えー　突然ですが、また転校生です」

『えぇー！』

クラスはざわめく、ほんの数日前に私が転入してきたというのに、
また転入生が来たということに驚いている。

「じゃあ入ってきてくれるかな？」

そしてドアが開き、クロ君が入ってくる。

私は気付くのに少しだけ時間が掛かったけど、クロ君ってイケメン
なんだよね。
だから、クラスはざわざわと小声が目立ち始める。
特に女子。

そして残念な事に昨日まではなかった机と椅子が私の横にある。
転入生を隣同士にしますか、なるほど。

「どうも始めまして」

クロ君は挨拶を始める。
っていうか、名前どうするんだろ？
クロです！　なんて言わないだろうけど。

「クロです！」

言ったよー！
思いっきり言ちゃったよ！
うわぁー　なんか快感を覚えるな～
というか、クロ君は恥ずかしくないのかな。

「き、君、ふざけちゃいかんよー」
「あっ、すいません。今のはあだ名って事で、
改めてまして、白井　黒です。明日香とは兄妹です」
新設定！？
聞いてないよそんな事、いつの間に決めたの！
しかも私は妹ですか！？
クラスはまたざわめく。
「はい。みんな静かにして、じゃあ黒君は妹さんの隣に」
先生に促されてクロ君は私の隣に来る。
そしてクロ君は小声で、
「よろしくね、明日香ちゃん♪」
と、めっちゃ楽しげに言う。
クロ君が席に座ると、私も小声で、
「なんで兄妹設定ができてるの？」
「なんとなくそっちの方が面白いかな～　って思って」
「いや、確かに面白そうな設定だけど、当事者になれば別だよ、
第三者から見ればおもしろいだろうけどね」
「僕は第三者だよ」
「……確かに気構えはそうだよね。でも当事者だよ」
っていうかクロ君ってS？

天然Ｓですか！？
私は玩具じゃなよ、分かってるよね。クロ君。
私は恐る恐るクロ君の顔を見る。
……笑っとるー！　しかも黒っ！
こんなんで私の学校生活どうなるのよー！

授業中はクロ君は大人しく勉学に励み、
休み時間になればその性格を活かして、
あっという間にクラスの男子達に解け込んでいる。
一方、私は転入初日によくしてくれた愛生ちゃんとおしゃべり中。

「ホントに明日香ちゃんの兄妹なの？」
「う、うん」
「いいな～　私は一人っ子だから羨ましいな～」
「愛生（あき）ちゃんは一人っ子なの？」
「うん」
「てっきり、お兄ちゃんか弟がいるかと思ってたよ」
「え？　何で」
「だってこの前、たく君お菓子買ってきといてね～
　って電話で言ってたよね？」
「あ～　それはお父さん」
「えっ、お父さんを君呼びですか？」
「うん。だって若いし」
「何歳なの？」
「二十三
「若ってか、えぇ！　お、おかしくない？」

「お母さんがね、再婚したの」
「あー　だからお父さんが若いんだ、よかった～」
「何で？」
あははっ、と私は笑ってごまかす。
っていうか、そんな事もあるんだね、世の中。
放課後。
私は何気なく、というかクロ君と別々で帰ろうという魂胆で、
教室を出てバス停までダッシュ、したけど。
なぜか、なぜかクロ君がバス停の待合席に座っていた。
先回り…かな？
でもおかしいな、私の方が早く出たはずなのに、
それでいて持ち得る限りの力を使って走ってきたのに、
なんで先にいるの？
しかも汗一つ掻いてないし。
「何してるのクロ君？」
「何って、バスを待ってるんだよ」
笑顔で答えるクロ君。
何でだろう、その笑顔が怖く思えてしまう。
「じゃなくて、私の方が早く出たよね？」
「そうだね」
「どうやって来たの」
「走ってきたよ」

クロ君はチーター並みの脚力を持っているというのか！？

バスが来た。

けど私はまだ聞きたい事があるか、クロ君をこの場にとどめる。

「何？　まだなにか話すの、バスの中でも話せるのに」

「いいの、この場でハッキリしときたいの」

そう。とクロ君はバスを見送る。

「で、なんでク」

ドカーンっ！！！！！！！

轟音が鳴り響き、鉄の残骸が雨の様に降っている。

道路を舗装しているアスファルトにはヒビが走り、

バス停から五十メートルほど進んだ所では鉄の塊が炎に包まれ、

人の声なんだろうか、耳を塞ぎたくなるような声が聞こえてくる。

そして私の目には炎に包まれた人たちが映っている。

バスが爆発した。

Ｆｉｌｅ．０７　私立夕日ヶ丘学園（後書き）

次話ではまたまた新キャラ登場！

File. 08　学園に潜む影（前書き）

学園編　第二話

Ｆｉｌｅ．０８　学園に潜む影

「キャー！」

私は悲鳴を上げる。
私だけじゃない、道を行く人も悲鳴を上げ、
校門に群れる生徒達も悲鳴を上げて学園の敷地内に逃げ込む。
その場で固まって動けない私の手を握るクロ君。

「何してる、早く来い！」
「あっあっあっ」

私は燃え上がる人達が目から離れず、
怯え、震え、思考が鈍速に回る。

さらに追い打ちをかけるが如く、
片側一車線である道路の向かい側のバス停に停車したバスまでも爆発する。

その光景を見た私はさらに混乱し、もう体を動かす余裕を奪われる
そんな私をクロ君は無理やりバス停から引き離す。

「ったく、今日は誰かの誕生日か～　じゃなきゃ物騒な世の中になったな～」
「……」
「何か喋れよ」
「んな、あんなの見ておしゃべりできるわけないじゃん！」

涙ながらに私は言う。
クロ君は、何を言ってんの。という表情を見せたけど、
私の反応がきっと普通だと思う、クロ君と私はやっぱり見えてる景色も、
いる場所も違うんだ。
同じ人間だけど、生きてる世界が違う。
それともまだ私が幼いだけ？
クロ君のいる世界に染まっていないだけ？

分からない。
何も、分からないよ。

学園内に逃げ込んだ私とクロ君は校門から百メートルほど奥にある木陰に身を置く。

「ほら、水」
「ありがと」
「悪かったよ」
「何が？」
「しろちゃんはさ、まだ裏社会（こっち）に来たばかりだったよね。
配慮が足りなかった」

私はクロ君の謝罪に返す言葉が出ない。
言葉は思い浮かべるのだけれど、口が動かない。
まだ、私は怯えていたのだ。
そんな私にクロ君は容赦なく、先程の真相の仮説を言う。

「さっきのは多分、僕を狙ってたんだろう。
一応お礼を言っとくよ、しろちゃん」
「クロ君を。狙った？」

「うん。まぁこの職業は恨みを買う事多いし、
それに野心の塊みたいな奴もいるからね。
僕の首を取って、名でも上げようとする奴もいるかもしれない」
クロ君は少し嬉しそうな表情で言う、でもどこか険しかった。
怒っているのか、呆れているのか、はたまた喜んでいるのか、
私には分からなかった。

「それに多分。共犯か犯人がこの学校内にいるね」
「えっ、生徒にってこと？」
「いや、教職員かもしれない。とにかく、僕の同業者が混じってるね。この中に」

クロ君は逃げ込んだ生徒たちを見渡す。

「いや～　まさかこんな所で君達に会おうとはね～」

聞き覚えのある声、それにタバコのニオイ。

まさか。

「刑事さん！　なんでここにいるの」
「なんでってお譲ちゃん、僕は刑事だからね。事件があればそこにいるさ」
「あー　そう言えば刑事さんだったね」
「は～　お譲ちゃんも意外と酷い事言うね～
それにしても、ほんと君という人間は厄介事が好きと見える。
今度はバスの爆破現場にいるとはね～」
「好きでいるんじゃない、それに僕達は今回死にかけたんだ。
違う言葉を掛けるべきじゃないか？」

「そうか、うん。そうだろうね」

刑事さんは私達の身なりを見て頷く。
そう、私たちは向かい側のバス停で爆破起こった際に、
煙に少し巻かれたいるので、服が少し汚れているのだ。

「いや～　疑ってごめんね。でも、君を狙ったのはまず間違いないだろうし、
　謝る価値もないかもね、それにお譲ちゃん。君も無関係とは言えないよ？」
「えっ？　何で」
「それは君が一番分かってるだろ？　自分の立場を考慮しなくちゃダメだよ」

刑事さんは私は鳳凰院　暦であることを知っているのだろうか、
まるで知っているような言い方だ。
いや、案外知っているのかもしれない、
でも立場上それを口に出来ないのだろう。
鳳凰院はそれほど強大なものだから。

「そうか、そう言えばしろちゃんも狙われる理由はテンコ盛りだったね」
「なんかその言い方はイヤだな～」
「しろちゃん、現実は受け入れなきゃダメだよ。
　それでもって最善の対策を講じる。これがこの世界での長生きの秘訣だよ」
「おー　良い事いうね～　さすがチェスのオーナー代理ってとこかな」
「アンタに褒められても嬉しくねぇよ。皮肉に聞こえてならないから」

「やだなー　僕らの仲じゃないか、そんな冷たい事言うなよ」

この二人、結構長い付き合いなのかな？
互いにそれなりの信頼がある様に見える。
ライバルであり友であるってやつなのかな？
男の友情ってやつは女である私には理解できない。

「それにしても、アンタが現場に出てくるって事は情報持ってんだろ？」
「まぁね。でも教えないよ～」
「この前。ビールやったろ？」
「あー　あの後おいしく頂いたよ。色々とね」
「そのお礼として、教えてくれないか？」
「う～、まぁいいか。今回の件さ、どうも毒爪（どくづめ）が噛んでるらしくてね」
「毒爪か、また厄介な奴らが」
「クロ君、毒爪って何？」

全く素人の私は二人の会話に付いていけない。
というか、二人とも私の事完全に忘れてるよ。
もう空気じゃん、私。

「あぁ、毒爪っていうのはね。僕らチェスと同じ商売して奴らの組織名さ、
まぁヤクザみたいなもんさ、ヤクザくらいしろちゃんも知ってるよね？」
「もちろん、それくらい私でも知ってるよ。
で、クロ君はその毒爪って人達に恨まれるようなことしたの？」
「え～と」

クロ君は私から視線をはずして、言葉を濁す。
その態度を見た刑事さんはニヤリと笑みを浮かべ、
「しまくりだよね～」
と言葉をはさむ。
「クロ君！」
「あー　もー　確かに恨まれる心当たりはあるよ」
「何したの？」
「それがさ、ありすぎて分かんない」
あー　間違いなくクロ君が狙われてるわ、これ。
私はとんだトバッチリ受けるとこだったと、はぁ～
「で、ここで提案なんだけど。君達さ。
捜査に協力してくんないかな？」
「「えぇ～～！」」
以外すぎる言葉、この人って頼みごとできたんだ。
いや、提案なんだけど。
え～
「どうするしろちゃん」
「何で私に聞くの」
「いや、なんかさ。女の勘頼み的な」
「私的には……いいと思う。多分」
怪しい。

なにか裏がある。とクロ君も思っているに違いない。
でも、解決はしたい。とも思っているだろう。
だから私達は答える。

「「引き受けた！」」

そして、この時。
私達に近づく影が一つあった。

Ｆｉｌｅ．０８　学園に潜む影（後書き）

なんか新キャラ登場とか謳ったのに影のみでゴメンナサイ！
次話では百パーセント、百二十パーセント登場してくれます。

File. 09　学園に渦巻く陰謀（前書き）

学園編　第三話です

Ｆｉｌｅ．０９　学園に渦巻く陰謀

「あらあら、チェスのクロじゃありませんか」

突然私達の後ろから声がした。
私が驚いて振り向くと、そこには金髪でお人形さんの様な少女が立っている。
歳は多分私達変わらないとおもう、身長は私より少し高い。
きっとハーフだからだろう。

「ん～　君は本当に色んな女の子と知り合いなんだね～」
「変態みたいな口ぶりで言うな！　こいつの事あんただって知ってんだろ」
「もちろん、毒爪のボスであるボツリヌストの愛娘、キシンちゃんだろ？」
「あら、私の事を御存知でしたか」
「も、もしかしてアナタって、この学校の生徒？」
「この服装を見てわかりませんの？　全くとんだバカですわね」

なんて毒を吐く人なんだろう、しかもスカーフの色からして上級生。
何この学園、っていうか理事長はどんな弱み握られるの！？
裏世界の人が二人もいるよ、まだいそうな雰囲気だよ、何コレ何パーティー？

「さてと、もう単刀直入に聞くけど、誰が標的だったのかな？」
「聞くまでもないんじゃなくて？」
「キシン、あんたも毒爪の組織運営に噛んでるんだろ」
「そうよ。でも今回の事に限って事前通達はなかったんですの」
「疑わしいね～　もう嘘のニオイがプンプン匂って来るね～」

「下品な物言いは止めて頂きたいですわ」
「じゃあさ、ヒントくんないかな？　心辺りぐらいあるでしょ」
「丁重にお断りしますの、犯人を見つけたければその足を使いなさい」

そう言って彼女はこの場を去る。
一体何をし来たんだか、そして私はまた会話に入れて貰えなかった～

「さて、しろちゃん。とりあえず犯人探しと行きますか」
「え、でもあのキシンって娘が犯人じゃないの？」
「お譲ちゃんの耳は飾りかい？　ちゃんとヒントをくれたじゃないか」
「えっ、でも断られたじゃないですか」
「しろちゃん、キシンは足を使えって言ったでしょ？」
「うん、でもそれって嫌味じゃないの？」
「それが違うんだな～　ホントお譲ちゃんってば鈍感だね～」

じゃあ何よ！　と私は頬を膨らませる。
もう、何このSコンビ。
ドが付かないだけいいけど、何か話すだけで疲れちゃうよ。

「毒爪の本部はさ、ここから十キロほど西にあるんだよ」
「さすがにそこまで歩くのは無理だろ？　お譲ちゃん」
「だから、足で歩ける範囲。つまりはこの学園の敷地内に犯人がいるわけ」
「じゃあ最初からそう言ってよ」
「あははっ、お譲ちゃんには少し難し過ぎたかな～」

じゃあ僕は他に調べる事があるから。と刑事さんは警察官が集まるテントへ向かい、

私とクロ君は取り合えず校舎へ向かう。
校舎の中に入ってみると中は外より騒がしかった。
まだ部活中の生徒や職員が錯綜する情報に困惑している。
ある生徒は、「校舎も爆発するらしいぞ！」と声を上げて外へ逃げ、
またある生徒は、「毒ガスが撒かれたらしいぞ！」と叫んでいる。

そんな中を私とクロ君は理事長室へと足を運ぶ。

「何で理事長室に行くの」
「あの部屋にあるでしょ、全校生徒の個人情報が」
「あー　なるほど。それを見て犯人の目星をつけようと。
　でもそれって犯罪じゃない？」
「今は非常時だし、それに警察から捜査協力依頼されたし、
　だから何の問題もない。いや～　それにしても初めてだな」
「何が？」
「犯罪が合法的に行えることさ」

うわ～　何か私まで悪人に思われるよね。この会話聞いてると。

そんな話をしていると、理事長室の前まで来た。

「さぁ、個人情報をみようか」

扉を開けるとそこには、赤く腹部が彩られた理事長が仰向けに死んでいた。

私はまた叫ぶ。
出せる限りの声で。

「君達は本当に犯罪を引き寄せるね～
それにお目当ての情報も手に入れられなかったんだって？
災難だよね～　いい神社紹介しようか？」
「なぁ、今さ、物凄ーく機嫌が悪いわけよ。
あんま僕を怒らせないでくれないか？」

声を震わせながらクロ君は言う。
あと少しでも衝撃を与えたら爆発しそうだ。
それにしても、まさか理事長まで殺されてるなんて。
一体、私の学園生活はどうなったの？
これも全部、クロ君。君のせいなの？

「死因は腹部の刺し傷による外傷性ショック死、
おまけに血液体中から抜き取られちゃてるし、
右手の指全部なくなってるんだよね～」
「カニバリズムか」
「カニバリズムって何？」
「簡単に言うと、人間を食べることさ」
「へっ……じゃあ理事長は」
「刺して腹から血を呑んで、後で指食ったんだろうね～
床に骨の一部が落ちてたし」
「って事は犯人は精神を病んでる可能性が」

キャー！！！！！

私は大声を上げる。
ちょっと想像してしまって、身の毛がよだつ。

クロ君や刑事さん、部屋きていた警察の方々が一斉に私に視線を向ける。

特に近くにいたクロ君や刑事さんは、うるさいよ。と視線で訴えている。

「でも、困ったね～　そんな輩がか弱い乙女たちがいるこの学園を彷徨ってるとしたら、ただ事じゃな済まないよ」
「刑事さんなんだから、なんとかしてよ！」
「いや、さすがに何の手がかりもないとなるとね。手の打ちようが」
「じゃあクロ君、プロだよね？」
「プロだけど、右に同じかな」
「も～　じゃあどうするのよ～」
「私が手を貸して差し上げましょうか？」

聞き覚えのある口調、そして独特の雰囲気。
入口に視線を移すと、案の定彼女が立っていた。

「キシンさん、帰ったんじゃなかったんですか」
「まだ少し用がありまして、それよりもいい情報がありましてよ」
「へぇ～　でもタダではくれないんだろ？」
「もちろん、それなりの情報を要求しますわ」
「こういうのは君に任せるよ」

ポン、と刑事さんはクロ君の肩に手を乗せる。

「な、ただで情報をやれってか、無理だ」
「タダじゃありませんわ、交換ですの」
「そうだよクロ君、立派な取引だし、生徒の命に危機が迫ってるんだよ！」
「あー　もう分かったよ。だけどな、先に言ってもらうぞ？」
「まぁいいでしょう、犯人は確かにウチの者でしたわ。ただ」

全員が「ただ？」と復唱する。

「コントロールが効かなくなった殺人鬼という事だそうですの」
「えぇ～　殺人斬って、もう何人か殺してるかもしないって事！？」
「そういう考え方もできますわね。詳細はこれに書いてあります」

とファイルをクロ君に手渡す。
そして、「情報を」とクロ君に催促する。

「ほんの数日前のことだ。白山総理の首席秘書官が死んだろ？」
「えぇ、確かツーリング中の事故死だとかニュースでしてましたわね」
「あれな、実はＣＩＡの暗殺だったんだよ。実行犯は小雨　嵐って同業者」
「なるほど、それはイイ情報ですわね」
「く、クロ君。刑事さんの前でそんな事言っていいの～！」

刑事さんは目をキラキラさせながら聞いている。
そんな刑事さんの真横でクロ君は涼しい顔で、堂々と喋っているのだ。

「大丈夫、この人は捜査も何もできないよ」
「へっ？」
「そうそう、俺はさ。組織の人間だからね～　自分の立場くらい弁えてるよ」

と笑いながら言ってのける。
いや、きっとそれも警官のとしはダメなんだよ。
でも、なんか同意見だよ。

「で、その殺人鬼がここに来た理由もあるんだろ？」
「鋭いですわね。さすがチェスってとこですか」
「もったいぶらずに早く」
「えぇ、どうも理事長が以前関わっていた国家プロジェクトの極秘資料が
学園内にあるとかないとか」
「なるほど、その殺人気君はキミの組織を裏切ったわけだ」
「ってことは、キシンさんが情報をくれる理由って、部下の処分って事？」
「あら、あなた以外と頭良かったのね」
「まぁー　こんな連中と付き合ってれば耐性がつくんで…」

私はボソッと言葉を零す。
いや、言葉というよりは不満かな。

「クロ君、何処から探すつもりなの？」
「いや、殺人鬼をおびき出す」
「どうやって？　そんなに簡単にはいかないと思うよ」
「欲しい物を提示すれば噛みつくさ」

クロ君は確信の笑みを浮かべてそう言った。

Ｆｉｌｅ．０９　学園に渦巻く陰謀（後書き）

どうでしたか、キシンちゃん？
今後とも活躍してくれます。
次話、できれば読んでみてください。

Ｆｉｌｅ．１０　学園に潜む殺人鬼（前書き）

学園編　第四話です

Ｆｉｌｅ．１０　学園に潜む殺人鬼

「誘き出すって、どうやるつもりなの？」
「理事長が関わってた国家プロジェクトの極秘資料が目当って事だろ？」
「確かにそうだけど、クロ君はどうやって見つけるつもり」
「見つける必要なんてないよ、もう僕が持ってるんだから」
「なんで持ってるの？」
「実はコレが目当てで来たんだよね」

はぁ～　って事はこの事態が収拾したらクロ君は学園を去るって事か、
よかった～　私の平穏な学生生活が戻ってくるよ。

あっ、でも確かパパに頼まれたって言ってたっけ
あ～　不安になって来た。

「ね、ねぇクロ君」
「なに？」
「クロ君はもう学校やめる、よね？」
「いや、面白いからしばらは生徒でいようと思う」

ダメだったよ。

私はあからさまに落ち込んでいる雰囲気を放ち、皆を少し引かせる。
でも、キシンさんは引かず、クロ君に迫る。

「詳しくお話を伺いたいですわ」
「やっぱあなた方もコレが目当てでしたか」

え、今。あなた方って言った？
って事はキシンさんもグル？

キシンさんは何とも悔しそうな表情を浮かべ、拳を握りしめている。
それを刑事さんは意外そうな表情で観戦している。
なんとも呑気な事だ。

「この資料のタイトルくらいはあなたも殺人鬼も知っているのでしょ？」
「えぇ、私と殺人鬼と呼ばれる彼はその資料を手に入れるよう命を受けてましたから」
「ふぅん、で。今回の裏切りは本当にあったの？」
「えぇ、それは間違いありませんの」
「その確信は何処から来てるのか教えてほしいな」
「仲間を、仲間を殺したのよ」
「確か毒爪では身内殺しは禁忌でしたね」

分かりました。とクロ君。
キシンさんは少し表情を曇らせる。
なにか思いだしてしまったのだろうか、
もしかしたら、殺された仲間と仲が良かったのかな。

クロ君はカバンの中からＴＯＰ－ＳＥＣＲＥＴと赤印の判が押された封筒を取り出す。

「これでしょ？」

クロ君の問いにキシンさんはコクッ、と頷いてみせる。

「さぁ放送室に向かおうか」
クロ君の言葉で私達は放送室へ足を運んだ。
ピーンポーンパーンポーン。
ＢＧＭが学園中に響き渡り、
「君の探し物はここにあるよ。零三号、ＪＩＡＰ
　欲しかったら第三多目的ホールまでおいで」
とクロ君は告げて放送を終了した。

「ねぇクロ君、その零三号　ＪＩＡＰって何？」
「あぁ、これ。今は凍結されてるんだけどね。
　以前政府がさ、日本版ＣＩＡ作ろうって企んでたわけよ。
　その詳細が記されているのがコレ、理事長は計画の
　進行・修正を監督する立場にいた人間の一人なんだよ」

以外すぎて私は言葉を失くした。
まさかそんな夢みたいなことが本当に画策されていたなんて、
いや～　現実って怖いね。

「へぇ～　君のその手に持ってるのってそんな重要な物なのか～
　ぜひ僕にも読ませて貰いたいね」
「なんだ。あんたにも野心ってものがあったんだな」
「まさか、ただの好奇心だよ。まぁそれより、
　彼女の方が僕より読みたいだろうしね」
と刑事さんはキシンさんを視線で指し、

確かに。とクロ君は頷く。

「あら、私にも読ませて頂けるのかしら？」
「無理だね。これも仕事でね」
「あら、一体誰の依頼かしら？」
「ウチのオーナーから頼まれたんだよ」

ビクンッ。

まただ。
キシンさんもオーナーさんの話題になると、体が震えた。
オーナーさんって一体どんな人なんだろう、みんな恐れてるみたいだけど、
もしかしたら、鬼みたいな人なのかな、
でも、面は良いってクロ君は言ってたしな。

「さぁ、目的地に向かおうか」

クロ君は自信に満ち溢れた顔で言う。

「捕まえる気満々ね。でも始末は私の手で付けさせて貰えるかしら？」
「いいよ。捕まえて聞きたい事聞いたら後は好きなようにしても」

ホント、私って最近人の命のやり取りを真近で見てるよな。
これってほんの数日前まではあり得ない事だったのに、
人生って何があるか本当に分かんない物だな～

私達が第三多目的ホールに着くと、一人誰かホールの中央に立っていた。

「カリム！」

中央に立っている人をみてキシンさんは声を上げる。

「お譲様、お久しいですね」
「よくも私達を裏切ったわね！」
「仕方なかったんですよ。彼らの方が高額だったもので」
「金で仲間を、家族を殺すなんて、ケリは私がつけます…っ！」

そう言ってキシンさんは銃をカリムに向ける。

「あー　待った。待った。僕の話が終わってからって言ったでしょ」
「早くしてね。もう私、自分でもいつ引き金を引くか分かりませんの」
「君さ、コレの鍵持ってるよね？」
「……えぇ。鍵がなければそれはただの紙きれ、
　二つあって初めて意味を成すものですからね」
「その鍵を渡してくれないかな？」
「それは無理なお話ですね」
「ここから逃げきれるとでも？」
「それは貴方からという事ですか、クロさん」
「まぁー　そうだけど。この刑事さんも強いよー」
「おや、どこかで見た顔と思ったら。元同業者さんじゃないですか」
「おっと、そこまでにしてくれないかな～
　過去はもう忘れたことにしてるんだ」

まさかの新事実！
っていうか刑事さんも裏社会側の人間だったんだ。
だから、クロ君と親し気にしてたのかな。

まさか元相棒だったりして……まさかね。
「そこのお譲さんも大物ですね。鳳凰院の御令嬢さん。かな」
「今は白井　明日香って言うの、分かる？」
あー　めちゃくちゃ怖い。
でも、私だって出来るってとこ見せないと。
「ほぅ、なかなかどうして、肝が据わってますね」
「それは皮肉にしか聞こえないよ」
「しろちゃん……成長したねー　僕は嬉しいよ！」
「いや、今喜ばれてもどんなリアクションをしていいか」
大袈裟に喜ぶクロ君、そんなに嬉しい事なのかな？
私は動じない自分を演じてるだけなのに、なんか申し訳ないよ。
「さて、話題を戻させていただきますよ。鍵ですが渡す気は」
「じゃあ、さよなら」
その瞬間、私は自分の目を疑った。
カリムと呼ばれた人の身体が下から伸びる無数の白刃に貫かれたのだ。
「かっ！　ぐはぁっ！」
彼は吐血する。
血は滴り、肉は抉れ、所々骨が姿を見せている
そんな目を背けたくなるような光景が私の目に映ってる。
「知ってたかい？　この多目的ホールってね。床が取り外す事が出

来るだよ。
　その為にこの下に空洞がある。そこにちょっとした罠を仕掛けたんだ」
彼は白刃に貫かれながらも、
「か、か、ぎ…っ！」
「あぁ、そんな物ないのは君が一番知っているだろ？」
「じゃ、な。ん」
「何のために芝居をしたかって言いたいのかい？
　簡単さ。君のお譲さまの嘘を見極めるためさ」
クロ君は目にも止まらぬ速さで私の横を走り去り、
銃を構えるキシンさんから銃を奪い取る。
「な、何をするんですの！」
「よく言うよ。嘘はいけないでしょ」
「な、なぜ私がウソをついてると？」
クロ君は耳に指を当てて、丸い形の機械を耳から取り出した。
「君が一番後ろに陣取って、携帯で連絡した事を友達が教えてくれてね」
「くっ」
「三手先を読んでおかなきゃね。特にこの世界じゃさ、
　それに理事長を拷問してもコレの事は話さなかったろ？」
キシンさんは以前見せた悔しそうな表情を浮かべる。
「そりゃー　そうさ。喋ったら家族が死んでしまうんだから、

最後は舌を噛み切ったろ、ね。刑事さん」
「ははっ、さすがだねー」
「いつ言うつもりだった？」
「その時がくれば。さ」
「クロ君！」

私は声を上げる。
特に何か言いたいわけじゃないけど、
声を上げずにはいられなかった。
もどかし過ぎて、もどかし過ぎて、とにかく声を上げなきゃいけない気がした。

「悪かったね、しろちゃんには話そうかと思ったんだけど、
タイミングがなかなか来なくてね」
「まー　でも。クロ、少しやりすぎじゃないか？
カリムに喋られちゃ困る事でも知られてた……とか？」

クロ君は冷たい瞳で刑事さんを睨む。
私はクロ君という人間が一瞬で分からなくなった。

そして私は小声で言葉を零す。

「……誰を信じたらいいのよ」

Ｆｉｌｅ．１０　学園に潜む殺人鬼（後書き）

次話ではクロとしろの関係に変化が！？

Ｆｉｌｅ．１１　白猫と黒猫（前書き）

学園から出ちゃってますけど、学園編　最終話です。

Ｆｉｌｅ．１１　白猫と黒猫

その後、刑事さんの計らいでカリムとキシンさんの件は隠ぺい、事件の概要は暴力団同士の抗争という形で公になった。

私とクロ君は刑事さんたちと別れた後、チェスに戻ったが、なんとも微妙な雰囲気が会話を妨げる。

でも、私はクロ君がいつも通り紅茶を淹れてくれたところで、話を切り出した。

「なんであの人は死ななきゃいけなかったの？」

私の声は平穏な空気を壊す、クロ君は少し鋭い目つきになった。けど、刑事さんやキシンさんに見せた目つきよりは柔らかい。

「なんでもだよ」

「誤魔化さないでよ。私はそんなバカじゃない」

「…知らない方がきっと、しろちゃんの為になる」

「それはクロ君が決めることじゃない、私が決めることでしょ！」

「そうかもしれないけど、

知ってしまったら、しろちゃんは変わってしまうかもしれない」

クロ君はやけに悲しそうな表情をする。

そんな表情を見せられたら強く言えなくなっちゃうよ。

「で、でも。知る権利はあるでしょ？」

「そうだね。確かに助手として知る権利はある。

でも、僕には雇い主として知らせない権利もあるんだよ？」

「言葉遊びでうやむやにはできないよ。今回ばかりは」
「本気。だね」
「本気だよ」

……。

クロ君は沈黙する。
そしておもむろに立ち上がり、机の引出しから一冊のアルバムを取り出す。
そのアルバムを持って私の隣に座った。

「これ」

そう言ってクロ君はアルバムを私の前で広げる。
一ページ目には「わが子の」とタイトルが付けられていた。

「話す前に僕の事を理解してもらいたいんだ」

そう言ってクロ君はページをめくる。

「これが赤ん坊の頃の僕だ」

わー　小っちゃい、ってかカワイイー

「オーナーさんってお父さんなの？」
「あぁ、育ての親だよ」
「育ての？」
「そっ、僕はね。捨て子だったんだよ。
捨てられてた僕をオーナーは二十歳の時に拾ってくれた」
「二十歳で」

「そう、まだチェス（ここ）を開店したばかりの頃、
一番大変だった時期に拾ってくれたんだ」
「だから、オーナーさんの言う事は何でも聞くって言うの？」
「そういう訳じゃない、ただね。この仕事を否定したくないんだよ。
もちろん内容によっては断ることもある。
でも、オーナーは少なくとも誇りを持ってやってた」
「でも、人殺しとか、盗みは犯罪だよ」
「そうだね。でも、視点を変えてみたら僕らのやっている事も正義
なんだよ？」

まぁ正義の定義によるけどね。とクロ君は言った。
でも、私は理解に苦しむ。
幼いころからこういう環境で育ってしまったから、
犯罪を肯定しているのか、
それとも、それがクロ君にとって普通なのか、
私は分からない。

少なくとも、今の私は犯罪といえば否定的な意見を持っている。

「視点って、どう変えるの？」
「たとえば、麻薬って知ってるよね？
マリファナとか覚せい剤とか？」
「うん。それくらいは」
「それを売ってるのは奴らもこの裏社会（世界）にいるけど、
それを妨害しているのも実は僕らなんだよ？
警察や政府機関にタレこみするのも僕ら」
「でも、犯罪を起こすのもあなた達でしょ？」
「そうだよ。でも、僕らから言わせたら。
法律なんて所詮人間が決めたこと、
時代が変われば変わる。そういう風に捉えてるんだよ」

「うっ…」

クロ君の言葉に私は言葉を詰まらせる。
たしかに、今言った事には一理あるかもしれない。
でも、それは幾らなんでも大げさすぎる。

「それに、悪い事ばかりしている奴らばかりじゃないよ。
自慢じゃないけどね。
僕は自分にルールを設けてるんだよ」
「ルール？」
「そう、オーナーのだけどね」
「そのルールって絶対的な物？」
「大切な人の為だけに否定できるもの、だからカリムを殺した」
「……そう」

いきなりの告白、まさか今このタイミングで言うとは。
それにしてもカリムはオーナーさんを殺そうとしたんだ、
だから、クロ君は。

するとクロ君は、突然人差し指を上に向け。

「ルール1、決して一般人を巻き込むな」
「へっ？」

そして指をもう一本立てて、

「ルール2、子供は決して傷付けるな。
ルール3」
「あ～　分かった、分かった」

私はクロ君の言葉を途中で遮る。
そして、私は明るい表情を作り、
カリムの事を頭の奥にしまう、
だって、私も大切な人が殺されそうになったら、
クロ君と同じことしただろうから、

でも、でも。

「でも、やっぱ犯罪はダメだよ」
「ふぅ〜　しろちゃんも頑固だね」
「頑固じゃないの！　普通なの！」
「はいはい。でも僕の仕事は犯罪を犯さなきゃ
　成り立たないんだけど？」
「でも、でも、やっぱ」
「しろちゃん」

今度はクロ君が私の言葉を遮る。

「でも僕は、これが間違いだとは思わないよ」
「ルールを守れば？」
「うん」
「今まで破った事は？」
「一度もない」
「私は一般人だったよ、しかも子供」
「しろちゃんは……一般人の立場にはいなかったし、
　それに十六歳は子供とは言わない」
「言い訳にしてはちょっと苦しくない？」
「うぅ……」

クロ君は少し汗を掻いている。

さすがにちょっと追い詰め過ぎたかな？

「まぁ、でも私を守ってくれたんでしょ？
こわーいおじさんたちから」

クロ君は思い出したように、そうそう、そうだよ！　と言う。

「ほんと、クロ君は黒猫みたいだね」
「黒猫？　それは悪い意味？　いい意味？　どっち？」
「どっちも」

クロ君は少し笑みを見せ、アルバムを閉じる。

「あー　まだ全部見てなかったのに～」
「個人情報だ」
「よく盗んでるくせに」
「で、しろちゃんはここから出てくの？」
「えっ、なんでそんな事聞くの？」
「だって、意見の相違があるんだから、いずらいでしょ」

私は少し目を瞑ってから、決心したかのように言う。

「白猫は黒猫の傍にいるよ……ずっとね」

Ｆｉｌｅ．１１　白猫と黒猫（後書き）

さてさて、二人の関係が良い方向へ向きました～
次話では、また厄介事が舞い込んできます。

Ｆｉｌｅ．１２　少女の懇願

クロ君の過去を知った日の翌日。

「ねぇ～　また勧誘の電話があったんだけど、電話番号変えない？」
「変えちゃったらお客さんが困っちゃうでしょ」
「ウチは有名なんでしょ？　電話番号くらい変えたぐらいで」
「お客様は神様だよ？　大切にしなきゃダメだよ」

今日本日は土曜日、全国の学生にとっての休日。
でも、社会人の方々はほとんど職務に勤しんでいるかと思います。
それは学生であるところの私とて例外ではなく、
助手らしい仕事をしている最中、そう、電話に出て対応したり、
お茶を淹れたり、洗濯やお掃除したり、お昼ご飯を作ったりと、
忙しく職務をこなしています。

そんな土曜の昼下がりの事、一人の来客が。

それは突然でした。
ドアが開いたのです。

「この人を殺してくだしゃい」

そうとんでもない事を言ったのは
一瞬、嵐ちゃんかと思うほど携帯を持った幼い少女だった。
しかも血まみれの姿で、

「ど、どうしたのその格好！」

私は慌てて少女を中に入れ、外を見渡す。
誰もつけて来てないか確認するために。

そしてさすがのクロ君もこれには驚いたようで、
座っていたのに立ち上がっていた。
そして私は少女の第一声を思い出す。

「ここに何しに来たのかな？」
「この人を殺してくだしゃい」

そう言って少女は震えながら携帯の画面を指差す。
そこには女性を刃物で刺している男の顔がガラス越しに映っていた。

「しろちゃん、とにかく着替えさせてあげて、嵐が置いて行った服があるから」
「う、うん」

私は嵐ちゃんが来た時の手順をもう一回踏む。
なんかデジャヴって感じだな。とか思ったりしながら。
でもこの子は正真正銘、見た目通りの年齢でした。

手帳？
いや、学生証か。
……久門（くもん）小学校三年生、椎名（しいな）　愛祢（あいね）ちゃん。

取り合えず身だしなみを整えたので、
クロ君の前まで連れて行った。

「で、お譲ちゃんは何しに来たのかな」
「お譲ちゃんじゃない、愛祢だ！」

「はいはい。愛祢ちゃんは何し来たんだ」

クロ君はどうやら子供が苦手らしい、少しイラついてる。
そこで私が二人の間に割って入る。
むくれてる愛祢ちゃんに私はアメを二つほど渡す。
今度は正真正銘の子供なのでこの戦法は通じた。

「で、愛祢ちゃんは何しにここに来たのかお姉ちゃんに教えてくれる？」
「うん。この人を殺してほしくて」

と、携帯の画像を再び私達に見せる。
今度は震えず、口調も普通だ。
きっとさっきは血にまみれて動揺していたんだろうな。
でも、まだ少し怯えているような気がする。

「クロ君。どうする？」

小声で私はクロ君に尋ねる。

「どうするって、子供の言う事を聞くつもり？」
「でも、血まみれだったし」
「事情を詳しく聞いてみてよ。僕は子供、苦手なんだ」

「愛祢ちゃん、お母さんとかお父さんは」
「お父さんはいない。お母さんは」

愛祢ちゃんは携帯の画面を再び私達に見せる。
ここ。とさきほどの画像で刺されている女性を指差す。

まさか、こんな事が。

「クロ君」

私はすがるようにクロ君を見る。

「君は復讐がしたいのか？」
「この人を殺してほしいの」
「それを復讐って言うんだよ」
「しってる。この人を殺して！」

少女は涙を浮かべ、クロ君に懇願する。

「ダメだ。その依頼は断る」
「えっ、何で！　何で断るの！　ここは何でもお願い事を聞いてくれるんでしょ！」
「誰から聞いたのかしらないけど、ウチではその依頼は受けられない」
「なんで、愛祢にお金がないから？　だったら愛祢を売ればいいよ！」

だから、だから殺してよ！　と涙ながらに愛祢ちゃんはイスに座るクロ君に言い寄る。
それでもクロ君は聞く耳を持とうとしない。

そんな光景を見ている私はとても心が痛む。

その時、クロ君は行動を起こす。
引出しから、注射針の無い注射器らしきものを取り出して、
愛祢ちゃんの首筋に当てる。

すると、プシュ。とかすかな音と共に愛祢ちゃんは目を瞑った。

「クロ君！」
「麻酔だよ。これでしばらくは大人しくなる」
「その子、どうするの？」
「ルール３　決して子供の言う事は聞くな」
「……やっぱり依頼は断るんだね」
「あぁ」
「じゃあ、この子を追いかえすの？」
「いや、しばらくはチェス（うち）に置いておくよ。
下手に返して明日の新聞に載るのは避けたいからね」

そのあと、愛祢ちゃんは私が寝泊まりしている部屋に運んでベッドに寝かせた。

「クロ君、少しくらいは調べてあげたら？」
「……まぁ、助手の助言があれば別かな」

そう言ってクロ君は受話器を取り、誰かに電話をかけ始める。
さっきは断ったクロ君だけど、やっぱり心配というか、気になってたんだな〜
クロ君は根は優しいけど、ちょっと表現が下手な部分があるんだよね。

私はクロ君が電話を掛けている間に、愛祢ちゃんが着ていた服の洗濯を始める。
これ、ひょっとしたら証拠隠滅になるのかな。
とか思った私は綿棒を血に擦りつけて、ＤＮＡを採取する。

そのあと写真を撮ってから、洗濯機に入れた。

「ねぇ、クロ君あの服洗濯しても良かったよね？」

「あぁ、別に構わないよ」

「よかった。あ、でも一応綿棒で血を取って、写真も撮っといたから」

「ありがと、しろちゃんはやっぱ僕の助手だよ」

「褒めても何も出ないよ？」

少し嬉しいけど、照れ隠しをして話していた時、またドアが何の前触れもなく開いた。

「こんにちわ～」

刑事さんがやって来たのだ。

Ｆｉｌｅ．１２　少女の懇願（後書き）

さあ、また新キャラが登場。
そして今回から　懇願の行方編です。
次話では刑事さんの目的と、事件の概要が明かされます。

Ｆｉｌｅ．１３　昼下がりの刺殺魔（前書き）

懇願の行方編　第二話です

Ｆｉｌｅ．１３　昼下がりの刺殺魔

「何しに来たんだよ」
「酷いな～　いっつもそれだよね。一言目はさ」
「刑事さん、まぁどうぞ」
と、私は刑事さんをソファーに腰掛けさせる。
「やっぱお譲ちゃんは優しいね～　クロにも見習って欲しいよ」
「今日はどんなご用事で来たんですか？」
「いや～　実はさ。ここいらで血まみれの少女が目撃されてるんだよね」

ドキッ。と私の心は反応する。
この人の嗅覚は半端じゃないな。

「それで来たってわけなんだな～」
「何しにだよ？」
「その少女の保護にさ。心辺りあるだろ？　二人ともさ」

バレてる？
この言い方ってバレてるよね。
今この場に愛祢ちゃんがいなかって良かった～
いたらもう言い訳できないし。

「その話、もっと事情を話すべきじゃないか？」
「ん～　情報が欲しいってわけか、でも君ならそんなの電話一本で済む話だろ」
「誠意ってやつを見せろって言ってるんだよ」

「あー　なるほど。まぁいいよ、ここらへんでさ。
殺人事件が多発してるのは君の耳にも入ってるだろ？」
「あぁ、最近じゃ十件も発生したんだろ、ちなみに六件が未解決」
「うは～　痛い所つくね～　でね。その一つに刺殺魔がいるんだけど、
その犠牲者の娘さんじゃないかなって見てるわけよ。
どこにもいないからさ。それに血まみれって事は生き残ったって事だろ？
だから必死に探してるってわけだよ」
「なるほど、唯一の目撃者か」
「そっ、もしかしたらその子一人で刺殺魔事件は解決しちゃうかもしれないからね」

私は二人の会話が一段落したところで、お茶を出す。
刑事さんは、おー　気が利くね。とお礼を言って一口飲む。

「で、刑事さん。なんで最近こんなに殺人事件が多いんですか？」
「さぁー　超能力者じゃないんで分かんないけど。
たぶんストレスでも溜まっちゃってるんじゃないかな～」
「そんな、鬱憤を晴らすのに人殺しなんて」
「お譲ちゃん。人間そんなに巧くできてないだよ、
何万人に一人くらいは異常者と呼ばれる人間はできるよ。
まぁ本人達が自覚してるかどうかは分かんないけどね」
「刑事さんって心理分析官なんですか？」
「違うよ、ただ思う所を述べたまでさ」

この人もこの人で充分変わり者だと思う、
それはやっぱり自覚しているんだろうか？
こんな事を言うだけに。
そしてクロ君は私達の会話を静かに見ていた。

このまま話が逸れて帰れ。と思っている様な目で。

「さてクロ。どうなんだい？　誠意は示したよ」

「……しろちゃん。携帯持って来て」

「う、うん」

私は愛祢ちゃんが眠っている自室へ行き、
机に置いておいた愛祢ちゃんの荷物から、携帯を手に取って部屋を出て、
クロ君が待つ部屋へ戻る。

ちなみ私の部屋は事務所から行き来可能だ。
事務所の入り口から見て左側にドアが奥と手前に一つずつあるのだけど、
私は奥の部屋を使わせて貰っている。手前がクロ君だ。
右側はオープンキッチン、その奥にお風呂とトイレがある。
そして中央奥にクロ君のデスクがり、その手前にわが事務所自慢のソファーが二つ、
ソファーに挟まれるようにテーブルが一つある。

「はい」

私は携帯をクロ君に手渡す。

「ほら、これに映ってるから」

クロ君は携帯を操作して刑事さんに投げ渡す、
これだったら別に私が渡した方が良かったんじゃないかな。
なんてちょっと思う。

「へぇ〜　君の趣味がこんなに子供っぽかったなんてね〜」
「それは僕の携帯じゃない」
「冗談だよ。そう怒らないでくれ、それにしてもコレの持ち主は？」
「その先はビジネスだ」
「ビジネスか、一体幾ら位かな」
「アンタじゃ一生働いても足らん額だ」
「そんなに渡したくないのかい？」
「……独り身は寂しいもんだ」
「……そう、まぁこの画像はコピーさせて貰うよ」
「あぁ、別に構わない」

刑事さんはそう言うと、自分宛てにメールして見事殺人犯の手がかりをゲットした。

「んじゃ、また来るよ」
「もう来んな」

刑事さんは笑いながら帰って行った。
クロ君は少し機嫌が悪くなって、新聞紙を広げる。
私はソファーに座って、お茶を飲む。

「ねぇクロ君、犯人捕まえるの？」
「分かんない」

クロ君は新聞紙を広げたまま答える。
その表情を私は見れない、新聞紙が邪魔で、きっと見られたくないんだろう。
そう私は思う。

「でも、調べたんでしょ？」

「まぁね」
「何か分かったの？」
「いや、あんま。僕の情報網に引っ掛からなかったんだ」
「そんなに大物なの！？」
「いや、小物だよ。小物すぎて引っ掛からなかったんだ」
「へぇ～　そんな事もあるんだね」
「でもさ。そんな小物に殺されるなんて、あの子の親も可哀想だね」
「クロ君って意外と優しいよね」
「僕は生粋の優男だよ？」
「そうだったね」

心配してなさそうに見えて、実は私以上に愛祢ちゃんの事を思ってるんだよな。
やっぱり、過去が関係しているのかな？

しばらくすると、クロ君は新聞紙を閉じて私が淹れたお茶を飲み始める。

すると、愛祢ちゃんが起きてきた。
愛祢ちゃんの第一声は寝ぼけた口調で、

「ママ～？」

Ｆｉｌｅ．１３　昼下がりの刺殺魔（後書き）

次話では中々進まない事態に進展があります。

Ｆｉｌｅ．１４　少女と黒猫（前書き）

懇願の行方編　第三話です

Ｆｉｌｅ．１４　少女と黒猫

愛祢（あいね）ちゃんはすぐに自分のいる状況を理解し、
今の言葉を否定するかのように、夢だよね。と呟いた。

「おはよう、愛祢ちゃん」
「あの人を殺して」

どうやら愛祢ちゃんはまだ諦めていないようだ。
今度はクロ君にではなく、私に向ってそう言った。

「ごめんね。お姉ちゃんはあのお兄ちゃんの助手なの」
「ダメなの？」
「そう、きっと愛祢ちゃんのお母さんもダメって言うと思うよ」
「そんな事言わないもん、ママだって愛祢と同じこと言うもん！」

涙目で訴える愛祢ちゃん。
こんな目で言われたら言い返せるものも言い返せなくなるよ。

私はとにかく愛祢ちゃんを落ち着かせるために、ホットミルクを出す。
愛祢ちゃんは少しお腹がすいてたのか、何も言わずともソファーに座って、
ホットミルクを口にする。
私は続けて、アメの入ったガラスの瓶を愛祢ちゃんの前に置く。
アメを見つけると、少し笑みを浮かべて一粒口にポイッと放り込む。

「で、君を警察に引き渡そうと思うんだけど」
「！」

愛祢ちゃんがアメを口に入れるの待ってクロ君はそう告げた。
なんかかなりイジワルな感じが拭えない。
悪役を演じたいのかな？

「なんへ、そんなこといふの。愛祢はけいさふになんかいふぁない！」

勢いあまって口からアメが飛び出してしまう、
それでも愛祢ちゃんは動じることなく言葉をこう続ける。

「殺してくれないなら、愛祢が自分でやる！」
「ちょ、愛祢ちゃん。落ち着いて」

私は立ち上がろうとする愛祢ちゃんの肩を押さえる。
今ここで立ち上がってしまったら勢いそのままに出て行ってしまいそうだから。
その愛祢ちゃんは私の制止を振り切ろうと足掻くけど、
私にも意地という物があるので、少し反則かと思ったけど、
歳上の特権であるところの、身長と体重を巧みに操り、
ソファーに座らせた。

「邪魔しないでよ！」
「愛祢ちゃんが行ったところで返り討ちに遭うよ！」

私の言葉を聞いた愛祢ちゃんは徐々に大粒な涙を零し、
挙句の果てには泣き始めてしまった。

「あわわわ、どうしよう」
「しろちゃん、追い詰めちゃーダメでしょ」

「いや、そんなつもりで言ったわけじゃないんだけど」

どうしよ～

これ、完全に私が悪役になっちゃってるよ。

私が慌てふためいていると、クロ君が愛祢ちゃんの傍まで来て、
頭を撫でながら、愛祢ちゃんの耳元で何か囁いている。
声が小さいので私には何を言っているのか聞こえないけど、
徐々に愛祢ちゃんは泣きやんでいるので、かなり良い事だと思える。

「ね、だから洗面所にいって顔を洗ってきな」

「……うん」

愛祢ちゃんはトコトコと洗面所へ歩いて行った。

「どうやったのクロ君、っていうか子供は嫌いじゃなかったの？」

「嫌いだけど、好きだよ子供は」

「それって矛盾してない？」

「そうかもね」

「なんで好きなの？　あんなに嫌がってたのに」

「子供はさ、嘘をつかないでしょ？」

「でも」

「子供の定義による。かな？　まぁ確かにそうだけど、
あれくらいの子は嘘をつく事はないでしょ」

「意外な事実発見って感じだな」

「そう？　でもホント子供って純粋だよ。僕と違って」

クロ君は少し羨ましそうな表情をする。

あ～　なんでだろう。その表情に何かこう、想いを抱いてしまうのは、

私だけだろうか。

「で、愛祢ちゃんになんて言ったの？」
「犯人を殺す事はしないけど、君の前で君の好きな事をさせてあげる。
って言ったのさ」
「そんな事言ったの！？　それで死ねなんて言ったらどうするのよ！」
「そんな事、面と向かったら中々言えないよ。それこそ確実に言う事をくと
いう状況だったらね」
「そうかもしれないけど、でも危ないよ」
「言ったでしょ、子供は純粋なんだよ」

クロ君はそう言うと、席に座り飲みかけのお茶を飲み始める。
私はやや心配気な表情で、愛祢ちゃんの様子を見に行く。
洗面所を覗いてみると、愛祢ちゃんはとっくに顔を洗い終えて、
なにか呟いている。
微かに聞こえてくる言葉は、震えていた。

自分の言っていた事を後悔しているのか、
それともクロ君の言った事を信じ、何を言うか練習しているのか、
どちらにしろ、愛祢ちゃんの不安は私に伝わって来た。

Ｆｉｌｅ．１４　少女と黒猫（後書き）

次話では、刺殺魔と愛祢ちゃんが再び相見ます。

Ｆｉｌｅ．１５　少女に見える闇（前書き）

懇願の行方編　第四話です

Ｆｉｌｅ．１５　少女に見える闇

それから私は愛祢ちゃんに声をかけることなく、
クロ君の元へ足を運ぶ。

「ねぇクロ君、愛祢ちゃん。大丈夫かな？」
「最終的には本人が決めるよ、どうするかは」
「でも、もっと出来る事があると思うの」
「しろちゃん、僕たちが出来ることはね。
手助けする事だけ、判断するはあの子だよ」
「その判断が心配なんだってば」
「信じてあげるんだね」

クロ君はそう言ってまた新聞紙を広げる。
私は仕方なく愛祢ちゃんが戻って来るのを、
ソワソワとお茶を飲みながら待つことにした。

それからだいたい十分後、
ようやく愛祢ちゃんは洗面所から戻ってきた。

「えらい遅かったじゃないか」
「レディーは身嗜みを整えるのに時間がかかるの！」
「まだレディーじゃなくて、ガールだろ」

クロ君の言葉に愛祢ちゃんは頬を膨らませ抗議する。

「まぁまぁ、二人とも」

私はまた間に割って入って愛祢ちゃんをなだめる。

「さて、そんな事よりも、行ってみますか」
「えっ、何処に行くの？」
「どこって、その子の求めてる者のとこへさ」
「見つけたの！？」
「あぁ、友達が教えてくれた」

愛祢ちゃんはなぜか無言だった。
嬉しい表情でも、悲しい表情でも、怯えた表情でもなく、
本当の無表情だった。

それから私達はチェスを出て、町の外れにある倉庫街へ着いた。

「こんなとこにいるの？」
「隠れるには打ってつけでしょ、それに住んでるらしいよ」
「ここにいるの？　あの男の人」
「あぁ、ここにいるよ」

私達は一つの倉庫の前に立っている。
ゆうに五メートルはあろう扉の前に。

その時だった。
倉庫の裏側から物音が辺りに響き渡り、足音が遠のいていく。

「逃げたか」
「追わなくていいの？」
「無理でしょ」

クロ君の言葉の後、バイクのエンジン音が聞こえた。

「あー　これは無理だね」
私は愛祢ちゃんに視線を落とす。
すると、なぜか安心したような表情を浮かべていた。
その後、なんの収穫もなく私達はチェスへと戻ってきた。
「愛祢ジュース買ってくる」
「じゃあ僕の分も頼むよ。君の分もおごってあげるからさ」
「わーい」
愛祢ちゃんはそう言って雑居ビルの正面に設置されている自販機へ。
「クロ君、私ちょっと心配だから見えてくるよ」
「無駄な心配だと思うけどな〜」
「そんなことないよ」
そう言って愛祢ちゃんの後を追いかける。
雑居ビルの入り口を出ると、愛祢ちゃんと男の人が視界に入ってくる。
「やぁ、また会ったね」
「ぁぁぁ」
愛祢ちゃんは男の人に怯えている。
私はとっさに思いだす、愛祢ちゃんが見せてくれた画像の男を。
「クロくーん！！」
私は叫ぶ、クロ君に聞こえるくらいの大声で。

「何叫んでんだ～　お前も殺してやろうかぁ！」
刺殺魔はナイフを持つ手を大きく振り上げ、私目掛けて振り落とそうとしている。
ガラガラ。と窓が開く音が聞こえると、
刺殺魔の背後にクロ君が銃を頭に突き付けて立っていた。

「動くなよ？」
「て、てめぇーなに者だ！？」
「おいおい、僕を知らないなんてアンタもぐりだな」
「はぁー　何言ってんだよガキが、どうせオモチャかなんかだ…」
刺殺魔がクロ君を刺そうと振り返ると、
ドンッ。
と音が鳴り、
刺殺魔は右膝を地面につけ、
右足からは血が地面に広がっている。
「言ったろ？　動くなってさ」
「ぎゃーーー！！　血がぁ　血がぁ出てるよぉぉ！！！」
「うるさいな～」
そう言うとクロ君は銃口を右腕に向け、
ドンッ。
撃つ。

「アンタが殺してきた人たちも」
今度は左足に向け、
ドンッ。
撃つ。
「こんな思いをして」
さらに左腕に向けて、
ドンッ。
撃つ。
「死んでいったんだよ？」
クロ君は冷酷すぎる視線と言葉で刺殺魔を精神的にも攻撃し、
刺殺魔は地面でもがいている。
それも愛祢ちゃんの目の前で、血はクロ君足元まで広がり、
もうすぐ愛祢ちゃんに届こうかというまでに出血している。
「がぁぁぁぁっ！」
「そういえば、愛祢ちゃんはこの男を殺してほしかったんだろ？
いいよ。気が変わった」
そう言ってクロ君は刺殺魔の眼前に銃口を向ける。

「待ってーー！！」

引き金に指が掛けられると同時に、
愛祢ちゃんの言葉が辺りに響き渡る。

File．15　少女に見える闇（後書き）

なんか急展開ですいません。

File. 16　懇願の行方（前書き）

懇願の行方編　最終話です

Ｆｉｌｅ．１６　懇願の行方

「なに？　願いが叶うんだ……あぁ、自分で撃ちたいのか」
クロ君は銃を愛祢ちゃんに差し出す。
けど、愛祢ちゃんは銃をクロ君の手から払いのける。

「愛祢は、愛祢は…」
「人を殺すって意味が分かったようだね」
「えっ」
「君も少しは成長したってことさ、
お母さんの事は残念に思うけど、
復讐なんてお母さんもきっと望んでなかったよ」

愛祢ちゃんはコクッ、と無言でうなずく。

私は、「ク～ロ～く～ん」とやや殺気放つ口調でクロ君の背後に行き、
渾身の力を込めて殴る。

「痛っー　なにするんだよ～」
「やりすぎでしょ！　どうすんのこの状況、刺殺魔死ぬよ！？」
「あー　大丈夫。もうそろそろ来る時間だし」

クロ君はそう言って、雑居ビルの前を通る道の端を指差す。
すると、救急車がサイレンも鳴らさずにこちらに向かって走って来ていた。

「さて、偽装工作をさっさと済まさないとな」

「へっ？」

クロ君は倒れている刺殺魔の手に銃を握らせて、これくらいかな。と呟いて銃を再び手に取り、マガジンを取り出して一発だけ残っていた弾丸も
刺殺魔の指先に押し当てて、マガジンに戻す。

「よし」
「ねぇ、何してるの？」
「この銃がコイツのだって証拠を作ってんの」
「やっぱり」

救急車は私達の少し手前で止まり、救急隊員の人がこちらに駆け寄ってくる。
そのすぐ後に刑事さんが降りてきた。

「いや～　クロがいきなり救急車連れて来いって連絡して来た時は驚いたよ～」
「ほら、こいつがお探しの刺殺魔だ」
「それくらい見ればわかるよ、
それより君は自首する為に僕を指名してくれたのかな～？」
「僕が自首？　犯罪なんてとんでもない、ただの正当防衛だよ」

なんならこの銃調べてみな。とクロ君は平然と言ってのける。

「まぁ君の事だから、この程度で捕まえられるとは思ってないよ」
「そうかい」
「で、そこの女の子だけど」
「僕の親戚の子だ」
「……なるほど、そう言う事か。まぁいいや」

刑事さんはそう言って救急車に乗り込み、救急車は間もなく発車した。
その後、私達はチェスに戻る。
あの現場はどうなるんだろう。とか思っていると、
近所迷惑もいいとこだよ。と思うほどのサイレンの音が耳につく。
クロ君はコーヒーを私の分も淹れ、自販機で買ったオレンジジュースを
愛祢ちゃんに出す。
私と愛祢ちゃんはソファーに座って一口、クロ君はイスに座って一口、
仕事の後の一杯を味わう。

「でも、愛祢ちゃん刑事さんに引き渡さなくて良かったの？」
「その子にもう血縁者はいないんだよ。ね？」
「うん、愛祢はママと二人きりなの」
「そう……でも、だったら愛祢ちゃんはどうなるの？」
「僕が面倒みるよ、ここらの孤児院は扱い酷いからね」
「でも、ウチは非合法専門でしょ？
いいの？　こんなところに純真な子供を置いといて」
「いいんじゃないの？　社会勉強にもなるでしょ」
「どんな社会勉強になるって言うのよ！」
「将来有望な警官か、同業者になれるって」
「なってほしくないわよ、ねぇ愛祢ちゃん」

私は愛祢ちゃんにも訴えるように促すつもりで聞いたんだけど、
愛祢ちゃんの返答は耳を疑うほど信じられない言葉だった。

「愛祢、クロみたいな大人になる！」
「…呼び捨て」

「えぇ～　ダメだよ愛祢ちゃん！　こう見えても悪～い人なんだよ」
「そんなことないよ、愛祢をおいてくれるんだもん」
「そうそう、僕は優しいからね～」
「もう…」
「今からみんな家族～」

愛祢ちゃんは笑顔でそう言う。
その言葉に私もクロ君も思わず笑みが零れる。
なんか、こういうのも悪くないな。そう私は思った。

Ｆｉｌｅ．１６　懇願の行方（後書き）

なんかグダグダな感じで終わってしまった気が、
感想など頂けると嬉しいです。　次話お楽しみに。

File．17　切顔の男来る！

それは突然の出来事でした。

日曜日の昼下がり、私が愛祢ちゃんと食後の紅茶を飲んでいると、アロハシャツに身を包み、いかにもハワイ帰りな男性がドアを開けて入って来たのです。

「あの～　何かご用でしょうか？」

「ご用も何も、ここ俺ん家なんだけど？」

……。

まさかオーナーさんってこの人！？

「あ、あのー　もしかしてオーナーさんでしょうか？」

「はいはい。俺がこのチェスのオーナーしてます、御心（みこころ）　謙弥（けんや）っていいます。どうぞよろしく」

「あっ、はい！」

刑事さんほどチャラチャラしてないけど、何か近いな。刑事さんの性格に。

「それにしても、クロから聞いていたけど。君が鳳凰院の？」

「はい、今は白井　明日香っていいます。この子は愛祢ちゃんです」

「こんにちわ～」

愛祢ちゃんは刑事さんの時とは打って変わり、笑顔であいさつする。

その対応にオーナーさんも笑顔を浮かべる。

「はいこんにちわ。それにしてもクロは両手に華だね。羨ましいよ」
「いや、そんなこと。それよりマダカスカルにいたんじゃ？」
「あー　それ。その仕事は終わってね、その後の仕事でハワイまで来たから、
　ちょっと寄り道したってわけさ」

オーナーさんは親切に状況を説明してくれるのだが、
私は見て、聞きたい事があった。

「オーナーさんって三十代なんですよね？」
「そうだよ。今年で三十七歳になる」

今年で三十七にもなる人が、
アロハに白い短パンで麦わら帽子かぶって、ビーサンで帰ってくる？　普通。
ありえないでしょ、おもいっきりバカンスで気の抜けた大人だよ。
下手したらこの格好、捕まるよね…。

でも、ホント若いな～
まだ二十代じゃないの？

「それにしても、クロは？」
「あぁ、今コーヒー豆買いに行ってます」
「まだ潰れて無かったんだな」
「三丁目の『焙煎』のことですか？」
「あぁ、あの店の豆は僕がここを始めてから買ってるんだよ」
「へぇ～　だからクロ君はコーヒーが大好きなんですね」
「愛祢はコーヒー嫌い、にがいもん」
「ははっ、愛祢ちゃんにはまだ早いよ、

しろちゃんくらいの歳にならなきゃ、コーヒーの美味さは分からないかもね」
「ふ～ん」
愛祢ちゃんはあまり興味がないのか、返事に意欲というものが感じられなかった。
オーナーさんも笑顔を浮かべて、ソファーに座る。
「ソファーでいいんですか？」
私はついつい声を掛けてしまう。
だって、ここの主はオーナーさんなのだからソファーではなく、クロ君がいつも座っている席に座ればいいじゃないか、と思ったのだ。
「いや、今あの席はクロのだからね。それにここはクロに任せてあるし」
オーナーさんがそんな事を言っていると、クロ君が豆袋を抱えて帰って来て、
目を丸くする。
一番最初に視界に入ったのはオーナーさんだったから。
「何してるの？」
「何って、ちょっと寄ったんだよ、我が家に」
「…お帰り」
クロ君は照れ臭そうな表情を浮かべて、そう言う。
久しぶりの義父（おやこ）子対面だからだろうか、

私はクロ君の傍により、小声で。
「照れてるのクロ君？」
と声をかける。
「な、そ、そんなんじゃない。突然帰って来たから、その…」
言葉を詰まらせるクロ君。
私は思わず、ニヤケてしまう。
だって、めちゃくちゃカワイイ表情だったんだもん。
「さて、もうそろそろ飛行機の時間か」
オーナーさんは腕時計を見て立ち上がる。
「もう、行くの？」
「あぁ、ここには本当に立ち寄っただけだからな」
「そう、次はいつ頃帰って来れるの？」
「さぁー　いつになるかな。また絵葉書出すよ」
「…うん」
クロ君は返事をして新聞紙を広げる。
もうすっかりこの行為が照れ隠しの一種である事を理解している私は、
ついつい笑みを浮かべてしまう。
「じゃあ、しろちゃんも愛祢ちゃんも、またね」
「はい」

「バイバーイ」

私と愛祢ちゃんは手を振ってオーナーさんを見送った。

そしてオーナーさんがテーブルに残した置き手紙が、

事件を呼ぶ事をこの時の私達は知る由もなかった。

Ｆｉｌｅ．１７　切願の男来る！（後書き）

オーナーさん初登場！　でも次話への繋ぎの為だけです…
でもこの先きっと、活躍してくれます。

Ｆｉｌｅ．１８　手紙の思惑

その後、クロ君はオーナーさんの残した手紙を見つけました。

「ねぇ、クロ君。なんて書いてあったの？」

「…あんまり言いたくない」

クロ君は少し俯いてそう言う。

「私はクロ君の助手なんだよ！　隠し事はもうやめて！」

「……」

それでもクロ君は口を固く閉ざしている。

本当に言いたくないんだ。

でも、

私はクロ君の傍まで行くと、クロ君の頬めがけてビンタする。

愛祢ちゃんは目を見開いて驚きの表情を浮かべていた。

「何を言いたいか分かる？」

「うん…でも言いたくない」

「クロ君！！」

私はもう一回ビンタする。

手が痛い、胸も痛い、心が軋みそうだ。

そしてクロ君の頬は赤色に染まっている。

「言いたくない」

凄い頑固な人、でもその眼を見ると私は諦めるしかなくなった。
クロ君の眼は絶対的な決意を私に伝えたから。

「…少し出かけてくるよ」

クロ君はそう言って、引出しからシルバーのブリーフケースを取り出して出かけた。

「…クロ君」

私は引きとめることも、声をかけることもできずにクロ君を見送った。

それから愛祢ちゃんに少し怒られて、そのすぐあと、あの人がやって来た。

「やぁ～　元気してるかい？　お譲ちゃん方」
「刑事さんですか」
「なんだオジちゃんか」
「なんだい？　この空気。めちゃくちゃ居ずらいね～」
「だったら帰ってくださいよ」
「お譲ちゃんがきっと喜ぶ情報を持ってきたんだけどな～」
「どんな情報ですか？」

私がダルそうに聞くと、刑事さんは私と向かい合う形で座り、ニヤリと笑みを浮かべる。

「クロがなんで君に内容を放さなかったかって情報だよ」
！
「教えてください！！」
「ノッノッノッ。ただじゃー　教えられないな～」
「お金なら後でちゃんと用意しますから！」
「お譲ちゃんからお金は巻き上げないよ、ただ一つ約束してほしい」
「わかりました、だから早く話してください！」
「そう慌てなさんなって、ちゃんと話すから。
　クロはね。暗殺を頼まれたんだよ」
「暗殺？　誰の」
「君のお父さんさ」

私は唖然とする。
だから、だから話したくなかったんだ。

「止めに行かなきゃ！」
「ちょーっと待った。約束まだ言ってないだろ？」

勢いよく立ちあがった私を刑事さんは止める。
気が急いでいる私は苛立ちを隠す事は出来ず、

「早く言ってください！」
「止めに行かない事。ってのが約束さ」
「そんなの無理です！」
「でも約束だろ？　もう話しちゃったし」

この人は何を考えているんだろう。私は正直そう思う、
今、私のポディションに違う人が居ても私と同じ行動をするだろう、

なのに、この人は何を考えてるんだ！
私の起こす行動くらい刑事さんなら簡単に想像できるだろうに。

「私は……行きます！」

刑事さんの静止を蹴り、私はクロ君の後を追いかけた。

Ｆｉｌｅ．１８　手紙の思惑（後書き）

短くてすいません。

Ｆｉｌｅ．１９　真実の真実

私は出来る限り速く、速く駆ける。
以前住んでいた家、生まれ育った家に向けて。

「お譲様！？」
「鈴木さん」

私の前に立つ白髪の老人は私を幼少の頃から世話をしてくれていた執事さんだ。

「お譲様、今までどちらへおられたのですか」
「それより、少年が来ませんでしたか？」
「えぇ、何でも旦那様の客人とかで、少し前に」

それを聞いた私は走る。
もう息も切れて、苦しいけど、とにかく走る。

階段を上り、廊下を駆け抜け、書斎の前まで来た。
ドアを開けようと、手を伸ばすと話し声が聞こえてきた。

「久しぶりだな」

クロ君！？

「あぁ、まさかお前から私の前に来るとはな」
「アンタが最初に来た時にもそう思ったよ」
「だろうな。で、何の用だ？　私は少々厄介事に取り組んでいるんだぞ」

「分かってる、だから暦を僕に預けたんだろ？」
「分かっているなら聞くな、金が欲しいならくれてやる。いくらだ？」
「そんな物は必要じゃない、今日は仕事で来たんだ」
「なんだ、やっぱり金か」
「……違う」
「じゃあなんだ！」
「アンタの暗殺だよ」

私はクロ君の言葉を聞いて部屋に入ろうと、ノブを回す。
すると、耳を疑う言葉が私の動きを止める。

「実の父親を撃つというのか！？」
「おいおい、その実の息子を捨てたクセに今頃父親気取りか？」
「私を殺すと言う事は、妹から父を奪うという事だぞ！　それでもお前はいいのか！？」
「アンタを殺すって事はしろちゃんの……暦の為にもなる」
「それはお前が決める事ではないだろう！　それとも何か、腹違いの妹に情などないと？」
「少なくともアンタよりは暦の事を想っているよ、だから」

待ってー！

私は何の考えもなく部屋に飛び込む。
クロ君は目を見開いて驚き、パパはホッと息を吐いた。

「しろちゃん……ッ！」
「クロ君、なんで」
「……」

クロ君はパパに向けて構えている銃を下ろそうとはせず、沈黙する。

「暦、はやく人を呼べ！」

「クロ君！」

「ぜんぶ、全部君の為なんだよ！」

「じゃあ何で話してくれなかったの！」

「この事が公になれば君が一番困るんだよ！？　それくらい分かるだろう！」

「そんな事を言ってるんじゃないの！　何で私に本当の事を話してくれなったの」

「言えるわけないだろう、僕はもう真っ黒な人間なんだ。そんな兄なんて君はいらないだろ」

「……そんなことない、今までクロ君と過して大変だったけど、楽しかった」

私は笑顔でそう言った。

クロ君とパパはそれこそ世界の終わりでも見たかのような驚きを浮かべた。

「パパ」

「な、なんだ」

「私、家を出ます」

「何を言う！　ここを出てどこに住もうというんだ！」

「チェスで私は助手として働いてるの！　だからここを出ます」

「くっ、暦！　私に逆らうとっ」

ドンッ！

パパの言葉をクロ君は一発の銃弾で遮る。

「暦も羽ばたく時が来たんだよ、いい加減分かれよ？」

こうして波乱の時は過ぎ、翌日私とクロ君は一日掛けて話し込み、
私はお仕置きとして、
『クロ君』という呼び方から一週間『お兄ちゃん』と呼ぶ事にした。
そして、私とお兄ちゃんと愛祢ちゃんの日々は続く。

File. 19　真実の真実（後書き）

急展開完結！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6269i/

しろクロ

2010年10月14日14時19分発行